
虚構世界の魔法使い

緋鉦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構世界の魔法使い

【Nコード】

N9154Y

【作者名】

緋鉦

【あらすじ】

「長く生きてれば、もっと賢くなれると思ってた。間違えも、過ちも、後悔もしなくて済むようになると、そう思ってた。」
過去の罪を贖うための、先の見えない旅の途上。ある時訪れた町の中で、二人は一人の少女と出会った。人々の淘汰を図る魔術師達と、魔術師の殲滅を掲げる人々と。幾つもの思惑の狭間で、過去を奪われた少女は己の進むべき道を模索し、過去を引き摺る二人は新たな居場所を探し求める。

序章 過日の記憶

一帯を覆う分厚い雨雲は、今日も青空を隠している。

太陽は淀んだ雲の向こうに隠れ、もう何年もその姿を見せていない。それだけでも十分に異常ではあるのだが、加えてもう一つ、看過出来ない問題が中空を埋め尽くしていた。

見上げる曇天に光る無数の白い粒は、季節を無視してこの数年間降り続けている雪である。降雪量が決して多くないことだけが、唯一救いであると言えるだろう。

それはとある地域のみで見られる、局地的な異常気象。

一般的には、そう思われている。

その地域 ラモネアの町は、氷雪都市の通称を持つ大きな町だ。北の大陸に存在し、元来降雪量の多い町であったことが、人々の意識からその異常性を多少和らげているのだろう。

冬が終わって芽吹きのない春が訪れ、晴れない曇天に不審を覚えながら夏を迎え、降り止まない雪に怯えて秋が巡り、不作を嘆きながら厳寒の冬を耐え忍ぶ。

一年の半分を雪に覆われた土地に生きる人々といえど、この異常気象はさすがに享受出来るものではない。そういう土地柄であるうと、寒さにある程度の耐性があるうと、作物さえろくに育たないのでは生活出来ようはずもないのだ。

最初の年は、近隣の町からの支援を得て凌いだ。

翌年は、事態を重く見た南の大陸から支援の申し出があった。

それから数年、異常気象はその原因も不明なまま、対策もろくに打てないまま、今日まで続いているのが現状である。ラモネアの町を離れた人間も少なくはない。

見捨てられた土地だと、嘆く者がいた。

人々の業が招いた結果だと、怒る者がいた。

自然の猛威を前に抗う術はないと、腐る者がいた。

「私、ですか？」

降り続く雪に埋もれ、住人を減らし、治安は乱れて活気の失われたラムネアの町。

その町の片隅に、葉を付けることを忘れた木々に囲まれながら存在する建物が一つ。元より閑静な自然の中にあつて、その建物は一層沈んだ雰囲気纏っていた。

「血縁者であるステルシア・フィオンズ・エルニカ様を、という話です。慈善事業というわけではありません……孤児だからといって誰も彼もというわけにはいきません」

「血縁者……ほんとに？」

「はい」

その建物 孤児院には現在、院長夫妻を含めて十五人の人間が暮らしていた。

先の戦争が終わってから、まだ十数年しか経っていない。世界中を巻き込んだ戦争によって乱された平穏が、それだけの年月で整う道理もなく、ここで暮らす孤児の半分以上は戦災孤児であつた。

残る数人はこの数年の異常気象に起因する口減らしか、何らかの事情で両親と死別したか、である。

ステルシア・フィオンズ・エルニカがこの孤児院へ迎え入れられたのは六年前で、奇しくもそれは、この止まない雪が降り始めた頃だつた。つまりステルシアは戦災孤児でもなければ口減らしでもない、別の とある事情で両親と死別した孤児である。

だからこそ。

大分今更ではあるが、今回のように迎え入れる人間が現れたこと自体は、特におかしな話だというわけではない。

長い時間を孤児院で過ごして来た院長にとつても、これが初めての経験というわけではないのだ。

「……………ふむ」

突然現れた来客者を一瞥し、院長は目を閉じて自らの頭を撫で付ける。

十五人もの人間が暮らすには、少々手狭と言わざるを得ない孤児院の応接室。そこでは現在、院長夫妻とステルシア、それから来訪者である黒いスーツ姿の女性が小さなテーブルを囲んでいた。

元より広い部屋でもない上、テーブルとソファア、壁に並ぶ本棚と暖炉、窓際に陣取る執務机のおかげで部屋は余計に狭く感じられる。

中央のテーブルを囲み、上座に座るのはステルシアだ。

その左側には、院長夫妻。ステルシアの右手で、つまり院長夫妻と向かい合う席にはスーツ姿の女性が腰掛けている。

客間の扉の向こうで時折聞こえる足音は、孤児達が聞き耳を立てているからだろうか。

この日、ステルシアに里親が現れた。

それは院長夫婦にとって、寂しいと同時に喜ばしいこともある。今年で十六歳になったステルシアも、年齢的には孤児院を出ていい頃合だ。

だが、今の荒廃したラモネアに一人放り出されたところで、生活していくのは難しいだろう。そんな事情があるからこそ、未だこの孤児院に居続けているのが現状である。

「……少し、よろしいですか」

「何でしょう」

難しい顔をした院長の問い掛けに、スーツ姿の女性は変わらない調子で答える。

「エティカ様、と申されましたか」

「はい、エティカ・ヴィエリ・ピースと申します。呼び捨てで構いません」

エティカと名乗った女性も、まだ随分と若く見えた。

ステルシアと並べてみれば、姉妹としても通じる年齢だろう。

ステルシアは黒の長髪と、銀を散りばめたような青い瞳を持っている。対してエティカは髪も瞳も明るい栗色で、顎の高さで切り揃えられたショートヘアは、毛先に少しだけウェーブがかかっていた。

この二人の容姿では、年齢こそ近くとも「姉妹だ」などとは通用しないだろうが。

「……………」

まるで声音を変えないエティカの受け答えに、院長は少しだけ渋い顔をした。白髪が目立ち始めた頭を撫でつけ、小さく溜め込んだ息を吐く。

さすがに三十歳近くも年下の女性に尻込みすることはないが、まるで機械を相手にしているようで調子が狂う、というのが院長のエティカに対する印象だった。

「……ステルシアはこの院に来て六年になります。何故、今更になつてそのような話を？」

「当主様は『民間防衛機構^{クロム}』の重役で御座います。先の大戦から続く混乱もあり、ステルシア様のご両親がお亡くなりになられたことも、これまで耳に入れる機会に恵まれなかったのだ、と聞いております」

院長とて、ステルシアを里子に出すことを渋るつもりはない。いつまでも孤児院に置いておくわけにもいかないし、年齢的にも一人立ちの時はそう遠くないと覚悟はしていた。

勿論、惜しむ気持ちもないわけではない。六年もの長い時間を一緒に暮らしてきたステルシアは、実子のいない院長夫妻にとって実の娘も同然だった。

孤児たちの中では年長者である、と自覚してのことか、あるいは生まれ持った性か。

他の孤児達の面倒もよく見てくれるし、家事の手伝いも自ら引き受けてくれる気立てのよさ。

だからこそ、ステルシアを引き取りたいと申し出る里親がどういう人物なのか、見極めたいという思いも芽生える。

「……ステルシア。この話、お前は思う？」

問われて、ステルシアは「私？」と小首を傾げてみせる。

院長にとって、今回の話は願ってもないほどの好条件だった。里

親の名前はこんな辺境に住む自分達でも知っているような『民間防衛機構』の重役である。どう転んでも、悪いようにはならないだろう。

少なくとも、この荒んだ町でこれからの人生を浪費するより、幾分有意義であるはずだ。

「私は……うん、その人に会ってみたい。何か思い出すことも、あるかも知れないし」

「……そう、か。お前がそう言うのなら、私達も喜んで送り出すでしょう」

「じいちゃん……」

「……院長と呼べ」

呆れたように、それでいてどこか嬉しそうに、院長は目元を和らげる。

話が纏まると、エティカは三日後に迎えに来ると言い残して孤児院を後にした。

荷造りのための時間と、六年もの長い時間を過ごしたこの場所とのお別れのための猶予だ。いつもより少しだけ豪華な夕食と、お別れの挨拶と。

「お姉ちゃん、どこか行っちゃうの?」「お金持ちのどこに行くんだろ?」「もう会えなくなっちゃうの?」「いいなー、毎日美味しいもの食べられるんだね」「あたしも、ねーちゃんと一緒に行きたい」「また一緒に遊べるよね?」

まだ幼い孤児達の反応は、湿っぽさのないどこかあっさりしたものだっただ。

物心ついた頃にはここで暮らしていた、という事情もあるのかもしない。

逆に「お別れ」の意味を知っている孤児達は、あまり言葉を並べない。

涙を堪える彼等、彼女等の頭をステルシアは優しく撫でてお別れの言葉の代わりとした。

約束した三日目の朝は、思うより早く訪れた。

冷たく、澄み切った朝霧の中、孤児院の玄関で院長とステルシアは静かに佇む。

相変わらず降り続く雪は、塀に囲まれた敷地を白く染め続けている。

庇の下で雪を凌いでいるステルシアは、雪の重量で庇が潰れたりしないだろうかと思いを考えていた。

ステルシアの、どこか物憂げな視線で空を見つめる姿に院長は頬を緩める。普段と変わらないステルシアの態度に、院長は言葉に出来ない寂しさを感じていた。

ステルシアが何を考えているのかを知れば、その感動も溜息に変わるだろうことは想像に難くない。

他の孤児達は、まだ眠りの中にいることだろう。

院長の妻は、やがて起きて来るであろう孤児達のために朝食の準備をしている。ステルシアとの別れの挨拶は、先ほど済ませたところだ。

「.....」

「.....」

会話らしい会話も交わさないまま、ただ時間が過ぎるのを待つ。それから間もなく、孤児院を訪ねて来たのは一組の男女だった。

男の方は、細身で背が高い。

目に痛い程の鮮やかな赤いコートに身を包み、フードの奥には黒い前髪と、細く吊り上がった金色の瞳が覗いている。町を歩けば擦れ違う子供達を一人残らず泣かせてしまえそうな、いかにも凶悪な相貌だった。

その男より三步後方に佇むのは、栗色の長髪と茶色の瞳を持つ女だ。どこか気品の漂う純白の浴衣に淡い紅色の羽織を纏い、大きめの白い雨傘を両手で握り締めている。

栗色の髪や、落ち着き払った仕草とその優美な立ち姿は、確かにエティカにも共通する特徴ではある。だが、エティカの髪は長くないし、瞳の色も少々異なる。

つまるところ、ステルシアにも院長にも面識のない相手だ、ということだ。

最初、院長とステルシアは彼等をエティカの関係者かと考えた。

「ここが中心、なんだよなア？」

訝しむ院長とステルシアを無視して、赤いコートの男が背後に控える女に問う。見ようによつては微笑んでいるように見えないでもない無表情のまま、女は静かに頷いた。

それを確認した男は、口の端を吊り上げてステルシアと院長へ向き直った。その獰猛な笑みを前に、院長は凡その状況を把握し、強張った声を上げた。

「ス、ステルシア、早く中へ」

逃げなさい、と続くはずの言葉が、ステルシアの耳に届くことはなかった。

その代わりに届いたのは視界を染める赤と、錆びた鉄の臭い。

コマ送りの映像を追いかけるようなスローモーションの世界の中で、倒れ行く院長の姿を呆然と見送るステルシア。

「じ、い……」

何が起ったのか。

何故院長が血を流しているのか。

何故門の前に立つ男は笑っているのか。

頬を濡らす感覚に意識を呼び戻されて、緩慢な動作で持ち上げた右手が頬に触れる。

自らの意思で動かしているはずの右手なのに、ステルシアにはそれが自覚出来ない。

意識が身体から離れてしまったような、まるで他人の身体に視点だけを通してしまったような、どこか現実離れた感覚。

ぬるつとした感触に、頬を撫でた右手が滑り落ちる。

震える掌を広げ、視線を落とす。

ステルシアの意識を飲み込むように、掌の赤色は一瞬で視界を覆う。

ステルシアの意識は、そこで途切れた。

第一章 大灯台の町 第一話

交易都市とも、海上都市とも呼ばれる港町アトレータでは、毎年秋の季節に灯台祭と呼ばれる航海安全祈願のお祭りが催されている。三つの大陸と三つの海がぶつかる海域に、岬の如く突き出した形状。それがアトレータの町の姿である。

元々この海岸は、一帯を断崖絶壁に囲まれた高台でしかなかった。在るのはただ、海岸の位置を知らせるための灯台のみだったという。アトレータの通称、海上都市の由来がここにある。

三つの海流がぶつかり合い、一年を通して荒れ続ける海の間こう。北の大陸には冰雪都市ラモネアが鎮座し、東の大陸には独立共和国市ファンドーラが控えている。共に大陸の玄関口として大きな港を持つ町であり、最も広大な面積を持つこの大陸に港がないのでは、何かと不都合が多かったのだという。

そういった事情が発端となって、先人達は断崖絶壁の海岸を少しずつ切り崩し、埋め立て、岩と木材で足場を広げ、やがてその場所に町を造った。

海の上に浮かぶ人工の町、アトレータの完成だ。

高台を切り崩す際に取り壊された灯台に代わり、新たに建てられた二つの大きな灯台を町のシンボルにして、アトレータの町は長く繁栄を続けている。交易の拠点としてもそう、観光地アトレータ大燈台としても、そう。

「とまあ、年中荒れ続ける海だから遭難する船も多くてね。航海の安全を願って、船を導くために海を照らそう、という考えがこの灯台祭の始まりらしいよ」

「……………」

切り崩された高台の両脇、北と東の大陸をそれぞれ照らす役割を持った大灯台は、観光地として機能出来るように、内部に展望室が設けられている。

「……今年も灯台祭の時期が来た、とは言え……ねえ」

「……………」

遠く、ラモネアを臨めるはずの展望室からも、今は空を舞う粉雪しか見ることが出来ない。空は灰色に染まり、大気は真冬のように冷え切っている。

灯台祭のコンセプトは、海を照らして航海の途上にある船に道を示すこと。

であるから、この祭りの期間中は町全体、夜通しで明かりを点す。大灯台の灯は虹色に染め上げられ、夜毎五千発の花火が打ち上げられる。

通りには数多の露店が並び、波の荒れない近海には屋形船が轟めき、町を埋め尽くさんばかりの観光客が各地から集まる、大陸でも首位を争う規模の一大イベントだ。

「打ち上げ花火って、この雪でも大丈夫なのかな。ベルはどう思う？」

「……………」

窓の向こう、まだ昼間だというのに薄暗い眼下の雪景色を眺めながら、少年はテーブルの対面に座る少女に話し掛ける。話し掛けられているはずの少女はしかし、少年に一切の反応を返さない。

その二人は、どこか対照的な姿をしている。

少年の方は、黒いコートを着ていた。長めの前髪は野暮ったい印象を振り撒き、どこか作り物めいた笑みが見る者の不信感を煽っている。

傍らには細長い布袋が立て掛けられており、黒地に金色の刺繍でおだまき芋環があしらわれたその意匠は、持ち主の纏う空気にそぐわない静謐さを漂わせていた。

一見無害そうに見えるが、どこか近寄り難い。

道行く人々が抱く、少年　ユーリテイトの印象は概ねそのようなものだった。

対して、テーブルの対面に腰掛ける少女　ストリベルは、少々

人目を引く格好をしている。

精々十歳かそこらであろう小柄な身体を包むのは、明らかにサイズの大き過ぎる白いウィンドブレーカー。椅子に座っていても、その裾が踵にまで届いていれば不審に思われても無理はない。その左袖は刃物で引き裂かれたかのようにズタズタで、転んで破れましたでは言い訳にもならないだろう。

裸足という要素もまた、その珍妙さに拍車をかけている。

更に、目深に被られたフードの内には目元を覆う仮面が覗いていた。それは人の顔を連想させない金属質の白い仮面で、動きのない口元の表情と相まって、酷く不穏な雰囲気を放っている。

フードの中から零れた髪は、肩に届かないストレートだ。それは対面に座るユーリテイトと同じ煉瓦色をしていて、ユーリテイトの瞳が髪と同じ色をしている辺り、仮面の下に隠れたストリベルの瞳も同様の色を持っているのだろうと推測出来る。

「それにしたって、何なんだろうね……この雪は」

呟いて、ユーリテイトは空を見上げる。

例えば冰雪都市と呼ばれるラモネアのような北国ならば、この時期でも雪は降っている。

というより、この数年間降り続けていた。

だが、長く異常気象と騒がれ続けたラモネアの常雪も、ほんの数日前に治まったのだという。それがどういうわけか、今度はこのアトレータで雪が降り始めた。

異常気象が珍しくもなくなったのは、もうずっと昔の話だ。局所的な集中豪雨、頻発する台風、地震、冷夏に暖冬、そして大雪もまたその一つである。

時間にして約六年。

異常気象としても異常な期間降り続いた雪は、そのあまりに長い期間故にそれ以外の可能性をも否定していた。

「でも、さ。これはつまり……そういうことだよねえ、ベル？」

「……………」

そうして視線を戻すも、ストリベルは黙したまま身動きさえしない。その素っ気ない、なんて言葉では足りない冷たい態度にも、ユーリテイトは不満一つ漏らさない。

平日の昼間という事情もあるが、何より外が雪による視界不良であるから、展望室には人が少なかった。

いかにも暇を持て余してますといったユーリテイトとストリベルの他には、いかにも仕事してますといったスーツ姿の男女や、いかにも休憩中ですといった私服姿の男達や、女達。いかにも観光中ですといった大荷物の大人達に、いかにもデートしてますといった軽装の男女。それからいかにも遊びに來ましたといった風情の少女の姿があるばかりだ。

スーツ姿の男女や、軽装の男女達はユーリテイトとストリベルを意識的に無視していた。見るからに普通ではない「兄妹」であるから、誰も自ら関わるうとは考えないのである。

少し世の中に目を向ければ、異常者や変質者、それから 異能者とも呼べる人種は、それこそ数え切れなくらいに溢れ返っている。

その手の人種には、無暗に関わらない方が賢い。

誰に諭されるまでもない、それは常識だ。

そんな常識を真っ向から無視して、タッタタツと軽快な足音を連れた少女が一人、ユーリテイトの側を通り過ぎて窓に張り付いた冷たい窓に両手を付いて、少女は「たかーい」だの「すごーい」だの「おおーう」だのと無邪気な唸り声を上げている。

その反応を背にして、ユーリテイトは少女を観光客の類だろうかと頭の片隅で考えた。

年齢的には精々十代半ばにしか見えない。学校に通っていないことにも、きつと何か事情があるのだろう。このご時世、それは大して珍しくもないことで、詮索する意味もない。

「ねえねえ、あのさ」

「んえ？」

突然掛けられた声に、ユーリテイトは気の抜けた声で答えた。

人々が見せるユーリテイトへの態度は、今この灯台にいる他の客達のそれが常であり正常とも言える。故に、まさか自分が話しかけられるとは思っていなかったのだ。

自らの醜態を自覚して口元を引き締め、話し掛けてきた少女が自分を見ていると確認してから、ユーリテイトは「何かな、お嬢さん」と言い直した。

少女は一瞬驚いたように目を丸くして、それから朗らかに笑ってみせる。

「お嬢さんって、そんなに年離れてるようには見えないよ？」

「……ああ、それもそうだね」

ユーリテイトは思い出したように相槌を打つ。

「それで、僕に何か？」

「あ、うん。何だか最近町が明るいから、何かあるのかなって」

「……うん？」

町の様子里に心当たりがない辺り、祭り目当ての観光客というわけではないのだろう。

「……灯台祭、って祭りがあるんだよ。船を導くために海を照らす、ってコンセプトだね」

「そっかー、それでこんなに明るくしてるんだね」

そう言って、少女は薄暗い雪空を眺める。

遮られた太陽の光に代わり、町の光が灰色の雲を仄かに白く染めている。

「……祭りは初めて？」

「どうかな、多分初めてだと思うよ」

「……そうかい」

特に思い詰めた表情も見せず、少女は窓の外をじっと見詰め続けている。その様子を横目に見ながら、ユーリテイトは少女について考えていた。

腰まで届く黒髪と、銀を混ぜたような青い瞳。年の頃は、外見が

そのまま実年齢として認識出来るなら十代半ば。妙な言い回しではあるが、外見と実年齢が一致しない人間をユーリテイトは何人も知っている。

服装はタートルネックのセーターに厚手のジャケット、七分丈のジーンズに茶色のブーツというどこにでもいる少女のそれだ。

見たところ、特におかしなところはない。発する言葉に少々違和感が残るが、何かしらの事情があるのだろうと考えられる。

「お祭りはもう始まつてるの？」

「……いや、明日からだよ。今はまだ準備期間」

「明日、かあ……」

それからまた少し、少女は唸りながら考え込む。

ユーリテイトは少女から視線を戻し、ストリベルと向き直る。

明日から始まる灯台祭には、外の町からも多くの人間が集まるだろう。当初は、そうなる前に町を移動するつもりだったのだが、この数日で事情は大きく変わってしまった。

ラモネアで発生した常雪が、今は海を越えたこのアトレータで継続している。正直なところ、六年もの長い時間というのが気になるところではあるが、ユーリテイトの中でそれはもう確信として意識に根付いている。

この常雪は、自然現象ではない。

人為的な事象の改編　魔術によるものだ。

誰が行使する魔術で、どういった意図があるのかは分からない。

だが六年間という、魔術としては異常とも言える長期間に渡って行使され続けてきたこの事象改編に、何の意味もないとは思えない。ラモネアからアトレータへ干渉領域が移ったこと。それが丁度、灯台祭の時期であることもそう。

何かが起きるであろうという、直観にも似た予感がそこにはあった。

「ねえ、あなたは明日もこの町にいる？」

問われて、ユーリテイトは再び少女に視線を向ける。

「それは、まあ……いると思うけど」

「じゃさ、明日のお祭り、案内してくれないかな？」

行ったことないんだ、と言って少女ははにかんでみせる。その無垢な表情を前にすると、ユーリテイトも少しばかり返答を躊躇ってしまう。

とは言っても、断らないわけにもいかない。

「……僕等はちよつと、やることがあつてね」

「そっかー、残念」

言うほど残念そうな顔もせず、少女は柔らかく苦笑する。

「でもさ、まだ町にいるなら、もしかしたらどこかで会つかも知れないよね」

「……可能性はあるかな」

「その時はまた、話し相手になってくれる？」

「そのくらいなら、構わないよ」

嬉しそうに笑って、少女は「ありがと」と呟いた。それからもう一度、少女は窓の外の景色を眺めて、緩んでいた表情を引き締めた。

第一章 大燈台の町 第二話

「ステルシア様」

その声は、展望室の出入り口の方から聞こえてきた。ユーリテイトが振り返ると、そこには黒いスーツを着た女性が一人、窓際に立つ少女を視線に捉えて佇んでいた。

ウェーブのかかった明るい栗色のショートヘアと、同色の瞳。年の頃は精々二十歳前後といったところだが、その身に纏う雰囲気はただの女性のそれではない。気配は異様に薄いくせに、その視線は鋭く研ぎ澄まされ、一度目を合わせてしまえば警戒せずにいられない。

堅気の人間ではない、とユーリテイトはその女性を評価する。

「エティカ、どうしたの？」

視線はストリベルへと戻しながら、ユーリテイトは意識だけをエティカと呼ばれた女性へと傾ける。視線こそステルシアの方を向いているようではあるが、その代わりとでも言わんばかりに、ユーリテイトに対してはひどく威圧的な、どこか重苦しさを感ぜさせるような無関心を態度として表していた。

エティカの元へ歩み寄り、幾つかの言葉を交わすステルシア。初見のユーリテイトから見ても、二人の間には主従関係のようなものが成立しているように映った。

やがて話を終わると、ユーリテイトの元へステルシアが駆け寄ってくる。

「私、もう帰らないと」

「……そっか」

それから思い出したように、ステルシアは照れ笑いを漏らした。

「そういえば、まだ名前も知らないや」

ステルシアはユーリテイトから視線を外し、ずっと反応のないストリベルを見遣る。顔を上げることさえしないストリベルに、ステ

ルシアは小首を傾げるだけで何も言わない。

「私、ステルシア。ステルシア・フィオンズ・エルニカって言います、よろしくっ」

そう名乗られて、ユーリテイトも名乗り返す。

「……………僕はユーリテイト・アルセラ・グラント。呼ぶ時はユーリでいいよ」

また会うことがあればだけど、とユーリテイトは心中で付け足す。ユーリテイトが名乗った後、ステルシアは対面に座るストリベルへ視線を移す。それでも、相変わらずピクリとも動かないストリベルを前に、ステルシアは少しだけ困ったような表情を浮かべた。

「……ああ、そっちはストリベル。ちよつと事情があつてコミュニケーションを取るの難しいんだけど、僕の妹だと認識してくれていいよ」

「ほうほう、そうなんだー。よろしくね……えーつと、ベルちゃん」特に言及することもなく、ステルシアはストリベルへ笑い掛ける。ストリベルは人形のように姿勢を変えないが、ステルシアがそのことに対して気分を害している様子はない。

その光景を見てユーリテイトは少しだけ口の端を緩め、逆にエティカの纏う空気は加速度的にその重さを増し、張り詰めて行くようだった。

何故これほど露骨に敵意を向けてくるのだろうか、とユーリテイトは訝しみながら、どうせすぐにお別れだとエティカを無視し続ける。笑顔で手を振り、エティカと幾つかの言葉を交わして、ステルシアは一人で展望室から姿を消した。

ユーリテイトは手を振り返してステルシアを見送り、その視線をそのままエティカへと固定する。

最早隠す必要もない、ということだろうか。

ステルシアがまだこの場に居た時に感じていた敵意は、今や殺意と呼んで差し支えないほどに膨れ上がっている。その表情も使用人のそれではない、戦場を知る者のそれだ。

展望室の出入り口から動かないエティカの無表情に、様子見に徹していた他の客達は競うように席を離れ始めた。展望室の出入り口は二つあり、エティカのいない方の出入り口から客達は走り去る。叫び声一つ聞こえないのは、まだ決定的な「事」が起こっていないからだろうか。

展望室の出入り口で僅かに身構えるエティカと、椅子に座ったまま動かないユーリテイトとストリベル。走り去る客達の足音が消えて静寂が訪れた頃、広い展望室には無言で向かい合う三人だけが残っていた。

その沈黙を破ったのは、エティカの誰^{すいか}何だった。

「ユーリテイトさん、でしたね。貴方は、何者ですか？」

「何者って……そうだね。ただの旅人だよ」

どうやらその答えに満足いかなかったようで、エティカは目を細くして値踏みするようにユーリテイトを見詰める。

「……ストリベルさん……そちらの少女は本当に妹ですか？」

「……、僕が娘のいるような年齢に見えるのかい？」

「そういう意味ではありません」

それからエティカは、少しだけ言い淀むようにしてストリベルを一瞥する。仮面に隠れて表情は見えず、露出している口元も動かず、指の一本さえ凍り付いたように反応がない。そこから推測出来るストリベルの心情など、皆無と言っていいだろう。

諦めか、割り切りか、あるいは確信か。

エティカはユーリテイトに視線を戻し、口を開こうとして、出来なかった。

「世の中には、知らないままにいる方が幸せなこともあるんだよ」

「……………」
コツツという足音が聞こえて、エティカは自身が一步後退っていることを認識する。

気圧された、と気付いて、エティカは自身の慢心を自覚し、眉根

を寄せた。決して油断していたつもりはないし、相手を格下と見ていたつもりもない。

だが、こうして後退った拳句、言葉の一つも返せなかったことが事実であり、結果だ。

これまで切り抜けてきた実戦の経験が、その記憶が、心のどこかで驕りを生んだのだと、エティカは結論付ける。

この煉瓦色の髪を持つ魔術師は、決して楽に倒せる相手ではないだろう。

追及を拒絶する言葉を発した後、ユーリテイトはエティカへの興味は失せたと言わんばかりに視線を逸らし、ストリベルと二人して椅子から腰を上げた。

その際手に取った細長い布袋は、恐らく武器の類を収めたものなのだろう。

何かする気かとエティカは警戒するが、ユーリテイトはその警戒を無視してストリベルの右手を取り、先刻他の客達が逃げ出した出入り口へ向かう。

「ま、待って下さい」

エティカは反射的に声を掛けた。

引き止めるべきではないのかも知れない、という思いがなかったわけではないが、エティカはその弱気な思考を押し殺す。そうしてでも、確認しないといけないことがあるのだ。

とはいえ、ユーリテイトにエティカの事情は関係ない。待てと声を掛けたところで、恐らく待ってはくれないだろうとエティカは頭の隅で考えていた。

「何かな？」

だが、ユーリテイトは意外なほどあっさり足を止める。

「……あ、あの」

返事があつたことを意外に思いながらも、エティカはこれ以上ペースを乱されまいと自身がやるべきことを思い返す。

深呼吸をして、一旦思考を停止させ、そうして冷静さを取り戻す。

怪訝そうな表情を浮かべるユーリテイトと、振り返ることすらしないストリベル。悪い人間には見えないが、胡散臭い身形であることには変わりがない。

エティカは意識してユーリテイトを睨み付け、腰の後ろに隠していた拳銃に手をかける。

「貴方は『^{ガラム}教導魔術師団』の関係者ですか？」

エティカの問いかけに、ユーリテイトは目を丸くして黙り込む。ユーリテイトには、この場面でエティカから何故そんな名前が出てくるのが理解出来ない。驚くよりも、訝しく思う気持ちが先に立つ。

「……………関係者ではない、と言って君は信じるのかな」

「この町にいる理由は何ですか」

先刻までと様子の変わったエティカに、ユーリテイトは不審を覚える。

察するに、そう。

まるで『教導魔術師団』がこの町へ来ることを知っていて、それを警戒しているような振る舞いだ。では、ただの使用人ではないだろうエティカが、ステルシアに付き従っている理由は何だろう、と考えると、話の流れを推測するのは容易い。

つまり、ステルシアは『教導魔術師団』に狙われている身で、エティカはその護衛なのだろう。あの、どこにでもいそうな少女にか見えなかったステルシアも、そうなりとそれなりに身分の高い令嬢なのかもしれない、とユーリテイトは推測した。

「……人を探していてね。君には関係のない話だよ」

結局のところ、ステルシアの正体がどうであれ、エティカの事情がどうであれ、ユーリテイトには関係のない話だった。わざわざ自分から厄介事に首を突っ込む趣味もなければ、無理に関わる意味もありはしないのである。

少なくとも、今のところは。

「行こうか、ベル」

「.....」

返事を待たず、ユーリテイトはストリベルの手を引いて展望室を後にした。

その後ろを、エティカが追ってくる様子はない。

第一章 大灯台の町 第三話

地上へと続く螺旋階段を下りながら、ユーリテイトは物思いに耽る。

ステルシアとエティカの事情は、確かにユーリテイトには関係のないものだ。

だが、そこに『ガラム教導魔術師団』が絡んでくるのなら、無関係だと切り捨てるわけにもいかない。今はまだ関わりたくはないという思いはあるが、ユーリテイトがユーリテイトである限り、その名が背負う責任から逃れることは出来ないのだ。

その責任を負う資格が、今もまだ存在するなら。

沈んでしまいそうになる思考を中断し、ユーリテイトは溜め息を吐く。

思い出す光景は、もう随分と昔の、終わってしまった記憶の断片でしかない。今更なかったことには出来ないし、思い悩んでも仕方ないことなのだろう。

そう分かっていても、気分が沈んでしまうのは止められなかった。それ故の、後悔だ。

人は生きている限り、過去を切り捨てることは出来ない。

一度起こってしまったことを、やり直すことも出来ない。

それ故に考えてしまうのは、どうすれば修復出来るのか。

一度壊れたものを、どうすれば作り直すことが出来るのか、ということだ。

「動くな」

長い螺旋階段を下り終え、一階の広間でユーリテイトを迎えたのは、黒いスーツを着た三人の男達だった。拳銃を構える黒い短髪の男が二人と、その中間には短剣を握る灰髪の男が一人。それ以外の人間の姿がない辺り、事前に人払いを済ませたということだろうか。

タイミングや服装を見る限り、エティカの関係者であることは考
えるまでもないだろう。

ユーリテイトは言われたまま足を止めて、状況の把握に努める。
彼等は何故、自分に銃を向けているのか。

事前に人払いを済ませたのは、民間人を巻き込まないためだろう
か。

その手段が合法的なものであるのかどうかも、気になるところだ。
だが、ここは観光名所としても有名なアトレータ大灯台で、当然
だが警備員だつて少なくない。騒ぎになっていない辺り、その行動
を合法的なものだと仮定して、目の前の彼等は当然のように拳銃を
所持している。

それから『教導魔術師団』に対する警戒と、魔術師たるユーリテ
イトに銃を向ける理由を考えれば、導き出される結論はユーリテイ
トの知る限り一つだけである。

「悪いが、身元が割れるまで身柄を拘束させて貰う」
名乗りもなければ、一切の説明さえない。

横暴と呼ぶに相応しい、一方的な宣言だった。

「……突然だね。僕が何か、問題でも起こしたかい？」

「魔術師である、というだけで十分だ」

そもそも、何故魔術師だと判断されたのだろう。

そう思ったが、わざわざ確認を取ることはしない。

恐らくは、エティカとの会話からそう推測されたのだろう。

エティカに疑われたのは、やはりストリベルの奇抜な格好のせい
だろうか。奇抜な格好をさせている本人である自身を棚に上げて、
ユーリテイトはそんなことを考える。

「事が起こってからでは、何もかも遅過ぎる」

そんな不当な扱いも、ユーリテイトには慣れ親しんだものである。
今更怒る気もしなければ、説教の一つでも垂れてやろうという気にも
ならない。

かといって、勿論大人しく拘束されてやる義理もない。

「言っておくが、魔術など使っただけ無駄だ。我等にそんなものは通用しない」

「……へえ、それは怖いね」

普段通りの無害そうな微笑みを浮かべたまま、ユーリテイトはその意識化で一つの魔術を念じる。男が本当のことを言っているとは限らないし、仮に魔術が正常に発動するならその方がこの場を離れるのに好都合、という打算もある。

例えば物語の中で語られる魔術や魔法は、詠唱や魔方陣、あるいは何らかの触媒を利用した儀式や、杖や本のような補助具を使用する。といったものが主流で、定石だ。だが、実際のところそれらは絶対に必要、というわけではない。詠唱や、補助具として武器を使用する者は多いが、それはあくまで魔術、魔法の発動を助けるものでしかないのだ。

基本的に魔術の行使に必要な行為は「思う」ことだけ。

魔術や魔法の発動とは、魔術師と呼ばれる人種が抱える原風景を概念化し、現象として世界に上書きする行為。

限りなく簡潔に述べれば、それが魔術のメカニズムである。

だが灰髪の男の言葉通り、思いに反してユーリテイトの魔術は発動しない。

正確には、発動はするが、その効力の大部分を減殺されてしまうようだった。

「……成程、どうやら君等が『民間防衛機構』^{クロム}の人間であることは本当みだいな。それも貴重な戦術兵たる？^{リデューサー}虚人？のお出ましとは恐れ入ったよ」

同時に、疑問も一つ湧き上がる。

今ユーリテイトが口にした通り、俗に？虚人？と呼ばれる彼等は、対魔術師戦闘において欠かすことの出来ない戦力であり、しかしその絶対数は魔術師達より格段に少ない。文字通りに希少かつ貴重な切り札というわけだ。

彼等？虚人？が貴重とされる理由はただ一つ。その、魔術による

世界の改編を減殺する能力にある。

そんな、所謂魔術師の天敵が、目の前に三人。

確かめてはいないが、恐らくはエティカも彼等と同類なのだろう。いくらステルシアが良家のご令嬢だとしても、護衛に？虚人？が四人というのは有り得ない。海上都市アトレータは人口二百五十万を超える町だ。通常の比率で考えるなら、十人で妥当。十五人集まれば他所の町から多過ぎると非難されてもおかしくない数である。

それが、ただ一人の人間のために、四人。

ユーリテイトはステルシアを思い出す。今は姿が見えないが、灯台の外で彼等が戻るのを待っているのか、或いはもう帰路に就いたか。

黒い髪と、銀のちらつく青い瞳。その瞳を除けば取り立てて目立つ要素はないが、年相応に愛らしい少女ではあった。確かに言動は少しばかり違和感の残るものではあったが、ユーリテイトはその点、他人のことをどうこう言える立場にはないと自認している。

ステルシアは、見かけ通りの少女ではないのだろうか。

単なる良家の御令嬢では収まらない事情を抱えているのだろうか。だが、だとしたら『民間防衛機構』にとってどれほどの価値を持っているというのか。

本当に『教導魔術師団』の魔術師がステルシアを狙っているのか。全ての事情を把握するには、情報が全然足りていない。

「……仕方ないね。敵対する気はないんだけど……少しだけ相手してあげる」

「……大層な台詞だな、小僧」

彼等の纏め役と思しき灰髪の男　サリファンは、握り締めた短剣の切っ先をユーリテイトへ向ける。

年齢相応に染まった灰色の短髪と、内心を読ませない無表情。正眼に構えた短剣は揺るがず、重心も読ませない。その立ち振る舞いや年齢から考えられる実戦経験は、五年、十年では足りないだろう。いかに？虚人？とはいえ、魔術師を相手に戦い続けてそれだけの

年月を生き延びたという事実は驚嘆に値する。

楽な相手ではないだろう、とユーリテイトは冷静に分析する。

ユーリテイトの目的は、彼等に敵対するつもりはないと証明することと、ステルシアを取り巻く事情についての情報だ。

せめて、何が起ころうとしているのかくらい知っておきたい。出来ることなら関わりたくないというのが本心ではあるが、では今すぐ逃げ出すことが出来るのかと自らの心に問えば、返答に詰まってしまうのもまた事実。

何故かなど、考えるまでもない。

もしこの件に、本当に『教導魔術師団』が関わっているならば、放置して好転することなど何もない。恐らく多くの無関係な人間が巻き込まれてしまうだろう。

そんな事態に陥るのを、黙って見過ごすわけにはいかない。

そうなれば、師に顔向けが出来ないからだ。

同時に、もう尋ね人にさえ意味はなくなる。

そして何より、これまでの人生を否定することにも繋がる。

だから、ユーリテイトにとってそれは譲れない一線だった。

「やるよ、ベル」

ユーリテイトの呟きに呼応するように、繋がれた右手を解いたストリベルは一歩前進し、左腕を水平に持ち上げる。ズタズタの袖から覗いたその腕に、男達は息を呑む。

そこにあつたのは、黒い金属によって構成された鎧のような義手だった。生身の腕よりは幾分太く、鎧を纏っているにしては少々細い。普段は袖の下に隠れて見えないが、直立している状態では恐らく指先が膝にまで届く長さだ。

まだ幼いストリベルの身体から繋がるそれは、どうしても見る者に痛ましい印象を与える。

「忍ぶ闇を隔て、我が敵を裂き、寄る辺なき孤高を誇れ。盾の如き剣を飾り、天鎧の端に其が身をやつを襲せ」
《ジャッシュメント・フレイド裁断の刃》より派生対象に《銀の爪メス》を展開」

ストリベルが腕を持ち上げると同時に、無骨な金属の指先をユーリテイトは優しく撫でた。するとその掌を追って、虚空から湧き出すように、獣が爪を現すように、曇り一つない白い刃がそれぞれの指の先に顕現を果たす。

それぞれの刃は矮小で、精々が十センチといったところだ。

実戦で使うには心許なく、黒く輝く鎧義手の放つ重苦しい威圧感の前では、ほとんど装飾としての価値しかないように見えてしまう。ただこれだけの改編が、今のユーリテイトには精一杯だった。

「……驚いたな、小僧。三人の？虚人？を前にしてそれほどの改編が可能とは」

「……嘘が下手だね、君は。『干涉強度』も『干涉規模』も『干涉速度』も『干涉深度』も、泣けてくるほど脆弱だって僕が一番感じてるさ」

ユーリテイトの苦笑交じりの台詞に、サリファンは不愉快そうに眉根を寄せる。

魔術師にとつての？虚人？は、言ってしまうえば抗菌剤だ。魔術と呼ばれる事象の改編を阻害し、滅殺する役割を持って生まれた、人々にとつての一つの希望。

並の魔術師であれば、一人の？虚人？が相手でも魔術の発動が困難になる。

そう考えると、このユーリテイトと名乗る魔術師の力量も知れるというもの。見た目通りの優男ではない、ということなのだろう。

驚いたという台詞も、断じて嘘ではないのだ。

サリファンは両隣で銃を構える二人の部下を確認し、まるで緊張感のないその様子に舌打ちを漏らしそうになった。

サリファンと比べると二人はまだ若いが、実戦経験がないわけではない。

だが歴戦たるサリファンに言わせるなら、二人はまだ「本物の魔術師」を知らない。

先の大戦を知るサリファンにとっては、仕方ないと分かっている

も悩ましい話であつた。

「マルティウリ、アサルダ。お前達は小娘の方を抑えろ」

「はっ！！」

揃って威勢のいい返事を返す二人をチラリと見遣り、サリファンは言葉を継ぎ足す。

「見た目に惑わされるな。アレは……お前達がこれまで戦ってきた誰より 強いぞ」

第一章 大灯台の町 第四話

微かながら、息を呑む気配を背中に感じて、サリファンは短剣を軽く振り下ろす。

その短剣の動きに合わせて、灯台内部に数発の銃声が轟いた。次いで、鉄板に釘を打ち付けたような、金属同士の衝突する高音が、銃声の反響を鋭く切り裂く。

「!?」

驚き、拳銃を構えたまま動きを止める二人と、眉を吊り上げ、一層視線を鋭くするサリファン。その三人の様子から、まさかストリベルが銃撃に直接対処出来るとは思っていなかったのだらう、とユーリテイトは推察する。

何が起こったか、それ自体は単純なものだ。

ストリベルがその黒い鎧義手で、飛来する銃弾の射線を見切つて遮り、弾き飛ばした。実際のところストリベルにもそのような離れ業は出来ないが、少なくとも発砲した側の男達はそう認識しただらう。

ユーリテイトにも、ストリベルにも、勿論？リデューサー虚人？達にも、結局人間である以上、発砲された銃弾を目で捉えることなど出来はしないのだ。

確かにストリベルが銃弾を弾いたという事実は存在する。

拳銃を持った二人に対して身体を横に向け、要所を守るように鎧義手を盾にする。そうすることで、弾丸の多くは鎧義手に着弾し、弾かれる。だが、それでも全てを防ぎ切れるわけでは勿論ない。鎧義手の盾を抜けてストリベル本体に辿り付いた銃弾も、確かに存在していた。

ただ、それ等の弾丸さえもストリベルは弾いてみせた、というだけの話である。

そうして出来た隙を、しかしユーリテイトは黙して見逃す。

ストリベルもまたそれに倣い、腕を下げて直立の姿勢を保つ。

元より、彼等を搦じ伏せることが目的というわけではないのだ。

自身に？虚人？に対抗出来る程度の能力があることを理解して貰い、害意がないことを主張すればいい。

本来ならそれも、お互いの立場を考えると通用しない手法ではあるだろう。

だが、今は状況が特殊だとユーリテイトは考える。一人の少女のために？虚人？が四人も動いていること自体、前代未聞と言っている。

ならば、それ相応に特殊な事情があると考え至るのも必然である。エティカとの会話から推測されるよう、四人の？虚人？達が本当に『^{ガラム}教導魔術師団』からステルシアを護衛しているというのなら、ユーリテイトのような闖入者に構っている余裕など本来ないのではないか、との推測も立とうというものだ。

ユーリテイトが『教導魔術師団』と無関係で交戦の意思がない以上、この戦いにはやはり意味がない。

このまま反撃せずに暫くやり過ごせば、話くらいは聞いてもらえる……かな？

多分に願望の混じった計画の杜撰さを、ユーリテイトは僅かな苦笑として表す。

その微細な表情の揺らぎを、常にはないほどの警戒を見せるサリファンが捉えた。

「……隙を突くまでもない、というアピールか？」

「言ったでしょう。敵対する意思はないって」

威圧するように低く押し殺した声にも、ユーリテイトはあくまで平静な態度で応じる。

表情を引き締め、アサルダとマルティウリは再び照準をストリベルへと合わせた。サリファンは短剣を眼前に構え、隙を見逃すまいとユーリテイトを睨み付ける。

その張り詰めた空気に、ユーリテイトは両手を挙げて降参のポーズ

ズを取った。だがその表情は相変わらず毒気のない薄笑いで、まるで自らが立たされている窮地に気付いていないようにも見える。

或いは、この程度では窮地と呼べないということだろうか。

「……小僧、悪いが時間はかけられん」

瞬間、ユーリタイトの鼓膜を震わせる一発の銃声。

背後から聞こえたそれと同時に、強烈な衝撃がユーリタイトの背中を襲った。

バランスを失い前のめりになったところで、サリファンが短剣を携えて駆け寄って来るのを視認する。ストリベルを避けてか、弧を描くようなコースを取り、残る二人の男達はサリファンと反対側へ駆け出していた。

ユーリタイトは一步足を踏み出して身体を支え、ついでに背後を一瞥する。螺旋階段の出口で拳銃を構える、エティカの姿がそこにはあった。

僅か、心苦しそうな表情に見えるのは、ユーリタイトの気のせいだろうか。

悠長に考える時間は、今はない。エティカの追撃を、ユーリタイトは地面を転がって回避する。撃たれたところで貫通されることはないが、痛いものは痛いのだ。

そうして半ば動きを封じられながら、ユーリタイトは視界の隅に残る二人の黒服を捉えた。鎧義手だけでは弾丸を防げぬように散開し、その銃口をストリベルへ向けている。

刹那、最初の銃声と同時にストリベルの足元で地面が爆ぜた。

「!?」

マルティウリがそれを認識した時には、眼前には拳銃を握り締める無骨な鎧義手があった。思わず漏れそうになった悲鳴は、ストリベルの不気味な仮面を視界に収めて、引き攣らせた喉で消える。

標的の消失から数瞬、その事態に気付いたアサルダがストリベルへ銃口を動かし、再び地面の爆ぜる音が響き、そして途中で動きを止める。

正確には、止められた。

その拳銃を握るのは、つい先刻まで数メートル向こうにいたはずの、ストリベルの鎧義手。信じ難いその光景に、アサルダは反射的に引き金を引き、鎧義手へ零距离での銃撃を放つ。

ガキン、という金属音が鳴り、そして、それだけだった。

アサルダは拳銃を引くことで鎧義手との隙間を僅かに広げ、そこから零れ落ちる銃弾を目撃した。それは見事に先端の潰れた、鉄屑としか見えない有り様だった。

僅か数秒の戦闘を見届け、ユーリテイトは自身に迫るサリファンへと意識を戻す。

「余所見とは、随分と余裕だな」

まずは一步後退し、エティカの銃弾を回避。

その反応に驚いた表情を見せながらも、一切の淀みもなく突き出されたサリファンの短剣を、ユーリテイトは身体を反らして躲す。その程度は想定していたのか、サリファンはそのまま短剣を横に薙ぎながら距離を取る。その攻撃をユーリテイトもまた後退することで躲し、そこに放たれる追撃の銃弾を回避するために更に後退。

短剣での近接攻撃をサリファンが担当し、それをエティカが拳銃で援護する。短剣による攻撃は一撃毎に距離を取りながらのヒットアンドアウェー。銃撃の援護と合わせて一つのサイクルとし、それが剣筋や銃撃のポイント、タイミングを変えながら何度も繰り返される。

灯台の中はそれほど広くもないし、逃げ回ったところで拳銃の射程から逃れることは出来ない。終わらない回避サイクルを消化しながら、ユーリテイトはいかにしてこの無益な戦闘を終わらせるかを考える。

だが、先に足を止めたのはサリファンの方だった。ユーリテイトもエティカも、突然攻撃をやめたサリファンを訝しく思い、示し合わせたように動きを止める。

「……その袋には武器が入ってるのではないのか。この局面で何故それを抜かない？」

サリファンの視線が捉えるのは、ユーリタイトの右手に握られた黒い布袋だ。確かにその中には、短剣を相手取るに相応しいといえるだろう、一振りの刀が収められている。

「……敵対はしないって、言ってるはずなんだけど」

「……この期に及んで、まだそんな戯言を抜かすか」

言いながら、サリファンは何気ない動作で腰の後ろから拳銃を抜いた。

「……！！」

次いで、発砲。

足元を挟った弾丸に、ユーリタイトは反射的に後方へ跳躍する。

直接弾丸を当てても戦果が得られない故の、威嚇としての一撃だ。

ユーリタイトを動かすことが出来たところ、それは十分に役目を果たしたと言える。

発砲と同時に駆け出したサリファンは、右手に握った短剣の石突きを左胸に当てる。切っ先はユーリタイトを捉えた、攻撃速度を重視した突きの構えだ。

これは、まずいね。

突然のことに不意を突かれて後れを取ったユーリタイトは、相手との距離や自身の体勢を鑑みて回避が難しいことを認識する。最初の突きはどうにか躲すことも出来るだろうが、その後に続くであろう斬撃を回避するのは、このままでは難しい。

長く実戦を離れていたせいで、どうやら勘が鈍っているようだ。ユーリタイトは内心で歯噛みする。数ヶ月程度のリハビリでは、そうそうかつての勘は取り戻せないらしい。

サリファンの攻撃を回避出来ないなら、取れる選択肢は二つだけ。大人しく斬られるか、回避する以外の方法で抗うか。

選択するまでもなく、考えるまでもなく。

頭で答えを出すよりも早く、ユーリタイトの左手は動いていた。

刀の入った袋を持つのは右手で、つまり左手は無手の状態である。閉じられた布袋の封を解いていては、とてもじゃないが間に合わない。

短剣をこの刀袋で受け止めるという選択肢は、意志の力で擦じ伏せる。

ならば、他に採れる手段はない。

「なっ ！」

サリファンとエティカは目を丸くして言葉を失う。

その視線の先では、何一つ切り裂くことなく受け止められた短剣が、血の一滴も流していないユーリタイトの左手に握られていた。

無論、その刃をだ。

その光景に驚くこと数瞬。

優秀とも言える立ち直りの早さは、やはり歴戦の猛者といったところだろうか。

サリファンは短剣から手を離すと潔く身を引き、エティカが続けざまに発砲してそれを援護する。ユーリタイトはその銃弾の回避に動きを制限され、その間に五メートル近い距離を稼いだサリファンは、腰の後ろから抜いた拳銃を構えてユーリタイトを睨みつける。

その様子を見ていたらしいマルティウリとアサルダの両名も、潰された拳銃を握り締めたまま、一旦サリファンの近くへと下がる。

そんな二人を追うこともせず、ストリベルは人形のように直立している。

「……小僧、貴様は何者だ。四人もの？虚人？の前で傀儡を動かして、武器を顕現させ、銃弾を防ぎ、拳銃刃物を素手で掴むなど……有り得ぬ。何故それほどの魔術が使える？」

警戒心も敵意も剥き出しにして、サリファンは静かな激情に浸した言葉で問い掛ける。

その唸るような声に耳を傾けながら、ユーリタイトは内心でまだ戦意を失っていないサリファンに感嘆の念を抱いていた。サリファンがどんな人生を歩んできたか知らないが、それなりに死線を潜り

抜けてきたらしいことは想像に難くない。

だからこそ、厄介でもある。

余裕ぶって振る舞ってはいるが、さすがに四人もの？虚人？を前にして魔術を行使し続けるのはユーリテイトにも荷が重い。

発現する魔術の貧弱さを考えても、割に合わないというものだ。

事情を訊き出すのは諦めて逃げるべきか。

ユーリテイトがそう考え始めた時、不意に金属の軋むような音が聞こえた。

新手かと、その音源　大燈台の入口に視線を向けると、重厚な木材を鉄で縁取った両開きの扉を開けて、燈台を離れたはずのステルシアが目を丸くして突っ立っていた。

その隣には、銃身の長い狙撃銃を担ぎ、厚手の黒いコートを着た女性の姿がある。煙草を咥え、鳶色の髪を背中あたりで結わえた、黒い瞳をした妙齡の女性だ。

状況から推測するなら、その女性もまた？虚人？なのだろう。

そう考え至ってしまうと、さしものユーリテイトとて呆れて物も言えない。

この狙撃銃を担いだ女性が？虚人？だと仮定するならば、この町にいるであろう？虚人？の半分がこの場所に集っているということになる。大陸中の注目する祭りが始まるというのに、治安維持に関しては問題ないのだろうか。

そこまで考えて、自分が悩んでも仕方がないと、ユーリテイトは気にしないことにした。

ステルシアと鳶色の髪の女性を確認し、燈台内の？虚人？達は決まりが悪そうな顔で咄嗟に構えた銃を下ろす。

そんな様子に見向きもせず、ステルシアの視線はユーリテイトとストリベルを捉えていた。

「ユーリ、どうしたの？」

不安そうな視線がサリファンに移り、非難するような眼差しへと変化する。

歴戦の猛者は年端もいかない少女から視線を逸らし、気まずそうにその視線を彷徨わせる。

「遅いから様子を見に来たら……これは、どういうことなの？」

その問いに、答える声はない。

「……誰か、説明してよ」

絞り出すようなステルシアの声に、ユーリテイトは「同感だ」と内心で呟いた。

第一章 大燈台の町 第四話（後書き）

次回より次章へ移ります。

誤字・脱字等ございましたら、ご報告お願いします。

第二章　？大蛇遣い？　第一話

曰く、ステルシアは最近までラモネアの孤児院にいたらしい。

曰く、ステルシアの親類が『民間防衛機構』^{クロム}の重役にいるらしい。曰く、今はその親類がいる、迷宮大都ブルーウェルへの移動中らしい。

昨日、大灯台内部での一幕がステルシアの介入でとりあえずの収拾を見たあと、事情を問うたユーリテイトにエティカが告げたのが、先の内容だった。

因みに『教導魔術師団』^{ガラム}の襲撃については詳細不明だという。ラモネアで一度襲撃を受けているらしく、次の襲撃を警戒していたという話だ。

それが、大陸の入口たるこのアトレータに到着して、ブルーウェルの本部と移送の段取りのための通信をしてる間に、見るからに魔術師の格好をしたユーリテイトとステルシアが接触してしまった、というのが戦闘に^{もっ}纏れた発端なのだという。

ステルシアにとっては初めて訪れるアトレータであるから、休憩がてら大灯台の見学を許していた、その矢先の出来事だったらしい。ユーリテイトからしてみれば、随分と傍迷惑な話である。

さておき、彼女等にしてみればユーリテイトは正体不明の魔術師だ。

状況も状況だけに、警戒しない道理はない。

『と、これが私達側の大まかな事情です』

『……そう、なんだ』

結論から言えば、どうしようもなく胡散臭い。

だが、それ以上に気になることが一つ。

それが、今こうして隣を歩いているステルシアのことだった。

「すっごいねえ、高いよねえ」

無邪気な笑顔を見せ、ステルシアはくると回りながらユーリ

テイトの先を歩いている。見るもの全てが珍しいと言わんばかりの振る舞いに、ユーリテイトは苦笑を隠せないでいた。ストリベルは今日も変わらず、ただ黙してユーリテイトの左手を握ってその隣を歩いている。そしてそのユーリテイトの様子を、並び歩くエティカは未だ警戒の残る視線で見詰めている。

四人が歩くのは、大灯台へ向かう山道だ。

その道程はここ数日の積雪で白く染まり、最低限の舗装しかされていない山道は最早その境界さえ地形から推測しないと分からない状態だ。

空は暗く、道は歩き難く、何より寒い三重苦。

大灯台へ続く道に四人以外の人影はなく、振り返って見下ろせば町中に眩しいほどの光が溢れている。手を翳せば、熱気さえ感じ取れそうだ。

灯台祭の幕が上がって盛大な賑わいを見せる町を背にして、流刑地へ向かう囚人を思わせる鈍い足取りで、雪の上に足跡を残して行く四人。

自分はこんなところで一体何をしているのだろう。

そんな思いを、ユーリテイトは無理矢理心の中に押し込める。

十

「灯台って二つあるんだよね。私、もう一つの方も行ってみたいなあ」

事の発端は、ステルシアのそんな発言だった。

東方大灯台からの帰り道。

前後を？^{リデューサー}虚人？に挟まれて、ユーリテイトと並んで歩きながら、

ステルシアはそんなことを言い出した。

「こっちの灯台って、なんとか、はんどら……だっけ。そっちが見えるんだよね？」

「独立共和都市フアンドーラ、だね。……まあ、この雪じゃ見える

ものも見えないけど」

そう言ってユーリテイトは立ち止まり、雪の舞う空を見上げる。手を繋いでいるストリベルも当然立ち止まり、その動きに釣られてステルシアも足を止め、空を見上げた。

突然足を止めた三人に？虚人？達は過剰なほどの警戒を見せた。流石に拳銃を抜くまではなかったが、いつでも取り出せる体勢でユーリテイトを正面に捉える。

その様子に気付いて、ユーリテイトは「別に暴れないって」と苦笑する。

「……雪、止まないかなあ」

その呟きに、ユーリテイトはステルシアを見遣る。

アトレータに降り始めたこの雪は、降り始めてもうすぐ一週間といったところ。晴れの日が恋しく思えてきてもおかしくない頃合いだろうか。

「……ステルシアは、雪が嫌い？」

「んーん……違うけど、でも、もうずっと……ずっと雪ばかりだから」

そう言って、ステルシアは少しだけ弱々しげな笑みを浮かべる。

「……もしかして、ラモネアに？」

「うん、この間まで向こうにいたの」

「……そう、なんだ」

この情報を、どう捉えるべきだろうか。

ラモネアからアトレータへ移行した異常気象と、同時期に渡ってきたステルシア。

そのステルシアを追っているという『教導魔術師団』と、魔術によるこの常雪と。

そして極め付けは、里子の移送のためだけに五人もの？虚人？を登用する異例さ。

突飛過ぎると思うし、考え過ぎかとも勿論思う。

それでも、状況は嘘を吐かない。

「だから、さ。もう一つの灯台からなら、ラモネアが見えるかも、だよな？」

「あ、うん……そうだね」

ステルシアは曇空を見上げる視線を灯台へ移す。その横顔がどこか寂しそうに見えたのは、多分ユーリテイトの気のせいではないのだろう。

だがユーリテイトは、ステルシアのことはほとんど何も知らない。どこまで踏み込んでいいのかも分からない。

魔術師にとって、心とは何より深くその人を表現するものだ。

故に、身勝手にその心に踏み込む行為を、ユーリテイトは躊躇ってしまふ。

「ユーリの言ってたやることって、何？」

「え、あ……何かな」

物憂げな表情から一変したステルシアの笑顔に、ユーリテイトは不意を突かれて言葉を詰まらせる。

「あ、し、た、だよ。何か用事があるんでしょう？ それって、明日じゃなきゃダメ？」

「ああ、それは……急ぎの用、というわけでもないよ」

どこにいるのか、そもそもその存在さえ定かではない捜し人よりも、今のユーリテイトにはこの目の前の少女の方が気になっていた。正確には、少女　ステルシアの抱える事情と周囲の状況が、だが。

知らない振りをして通り過ぎれば、何か取り返しのつかないような事態を招くような予感がそこにはあった。

それはステルシアがどうと言うより、あの『教導魔術師団』が関わっているという事情が大きく絡んでいるのだが。

「良かったつ、それじゃ明日付き合ってよ。もう一つの灯台に行きたいの」

「ス、ステルシア様っ」

さすがにこれ以上話が進むのはまずいと思ったのか、漸くエティ

力が口を挟む。最初にユーリテイトが感じたような、固い印象はそこにはない。もしかすると、あれは意識して作り上げた仕事用の人格だったのだろうか、とユーリテイトは漠然と思った。

「あ、エティカも来る？」

「　　っ、そういう意味じゃありませんっ！！」

本来は主従に近い関係なのかもしれないが、その光景はまるで仲のいい姉妹のようだった。楽しげに笑うステルシアと、顔を赤くして叫ぶエティカの姿に、ユーリテイトは自覚しないままその表情を柔らかくする。

「とにかく危険です！！　禁止ですっ！！　いつまた『教導魔術師団』の魔術師が襲って来るか分からないんですよ！？　明日はこれからの段取りでサリファンさんもないし　　」

そう言っただけでエティカが指さす先には、何とも微妙な表情でそのやり取りを見守っている灰髪の男の姿があった。どうやらサリファンという名前らしい、とユーリテイトは記憶に書き足す。

「大丈夫だよ、ユーリもいるし。強いんだよね？　皆、ユーリに負けちゃったんでしょ？」

「ま、負けてなんか……………っ」

完全に否定し切れなかったのか、エティカは言い淀んで、ユーリテイトを横目に睨む。

その視線を受けて、ユーリテイトは巻き込むと言わんばかりに両手を挙げて降参のポーズ。

その左手にはストリベルの右手が握られたままで、それは何とも間の抜けた姿だったとか。

そのユーリテイトの態度に何を思ったか、エティカはザクザクと雪を踏み締めてユーリテイトに詰め寄り、睫毛の数まで数えられそうな至近距離で叫んだ。

「わ、私も同行しますからっ！！」

「あ、うん……………そう？」

気持ち後退しながら、ユーリテイトは適当な答えを返す。それを

判断するのは自分じゃないだろう、などとは勿論口にはしない。

結局、ステルシアが押し切る形でユーリテイトの同行が認められてしまった。因みにユーリテイトには意思表明の機会さえ与えられていない。元々探る気ではあったわけで、ユーリテイトとしては好都合と言えなくもないのだが。

とはいえ、全面的な信頼を得たわけでは勿論ない。ユーリテイトに対する牽制と周辺の警戒を兼ねて、マルティウリとアリステル狙撃銃を担いだ鶯色の髪の女性だ。の二人が適当な距離を置いて四人を監視するという形で話はついた。

面と向かって牽制と言われたことに関しては、ユーリテイトも笑うしかなかった。

と、ここまでの話で済んでいれば、まだよかったのかも知れない。「ああ、そうだ……ステルシア。一つ聞いておきたいことがあるんだけど、いいかな」

「ん、なーに？」

一行が再び歩き出してから間もなく、ユーリテイトがどこか上機嫌なステルシアへ問いかけた。これといった反応はないが、サリファンやエティカ辺りは聞き耳を立てていることだろう。聞かれて困る話というわけでもなく、ユーリテイトは構わず話を続けた。

「その、襲撃して来た魔術師の特徴とか、教えてくれないかなと思っ
つて」

その質問に対して、ステルシアの反応は不思議そうに首を傾げるというものだった。想定外のその反応に、ユーリテイトも同じように首を傾げる。

「私、そんなの見てないよ？」

それは一体、どういう意味だろう。

「……………、えっと……………」

困ったような表情を見せるステルシアから、こちらもまた困り顔

のエティカへと視線を移す。それから順に、サリファン、マルティウリ、アサルダと視線を移して行くが、浮かべる表情は誰も似たようなものだった。

アリステルだけは何故か挑戦的な微笑みを浮かべているが、これは最初に大灯台に乗り込んできた時から変わらない表情だ。特筆すべき点ではない。

だが、口を嚙む？虚人？達の沈黙を破ったのは、アリステルその人だった。

「いやさあ、記憶喪失ってやつだよ。その娘は襲撃のこと、何も覚えちゃいないのさ」

「記憶、喪失……………」

煙草を揺らして意地の悪そうな微笑みを浮かべるアリステルに、ユーリテイトは少々引き攣った表情で答えた。謎ばかりが増えていく状況に楽しみを見出せるほど、ユーリテイトは酔狂でも好事家でもない。

重く淀んだ溜め息の一つや二つ、漏れたところで仕方のないことだと、ユーリテイトは自身に言い聞かせた。

第二章　？大蛇遣い？　第二話

十

記憶喪失。

ラモネアで受けた『教導ガラム魔術師団』の襲撃を、ステルシアは覚えていないという。単純に考えるなら、危機的な状況に陥ったが故の精神的なショックが原因、といったところだろう。

聞けば、その襲撃の折にはエティカ達も居合わせていたらしい。ただ、事前に動きを掴めていなかったようで、襲撃そのものを防ぐことは出来ず、相応の被害が出たという。煮え滾るような怒りを抑えるエティカの表情から、その被害の程も知れるというものだ。

ステルシアが記憶を失ったのは、そう考えれば救われた部分もあったのだろうか。

ステルシアの中ではその襲撃事件はなかったことになっており、しかし失われたはずの記憶の穴を気にしている様子もなかった。

もしかすると、ステルシアの中では事件前後の記憶の整合性が取れるよう、記憶領域において何らかの改編……辻褄合わせが行われているのかも知れない。

孤児院にいたことは勿論ステルシアも覚えているようだし、先にエティカの言った事情でそこを出て来たことも覚えている。

ただ、襲撃事件だけがなかったことになっているのだ。

とはいえ、精神的なショックが原因で記憶を失っているのなら、あえて思い出させることもないのかも知れない。

少なくとも、ユーリテイトにはそこまで深く関わる義理もない。ユーリテイトにとって重要なのは『教導魔術師団』の動向であって、ステルシアの抱える問題ではないのだ。

「だからそう睨まないでくれると嬉しいんだけどね……」

「……私は、まだ貴方を信用したわけではありませんので」

昨日とは打って変わり、仕事人間としての人格を取り戻したエティカがツンとした態度でユーリテイトから視線を外す。どこか幼くも見えるその拳動に、ユーリテイトは薄く笑う。

「……何がおかしいのですか？」

「いや、うん……何でもないよ」

余程ステルシアを気に入っているのだろう。エティカ本人に聞いたところで、それを肯定する言葉が返ってくるようには思えなかったが、ユーリテイトには確信に近い直感があつた。

あるいはそこに、懐かしい光景を見たのか。

ユーリテイトは判断が下る前に目を閉じる。

「……何が目的か知りませんが、下手な行動は慎むことをお勧めします。アリステルさんは優秀な狙撃手です。その銃口が常に貴方を捉えていること、努々（ゆめゆめ）忘れませんよう」

「ははは……、心に留めておくよ」

ユーリテイトが今ここにいるのは、内心はともかく形としてはステルシアのお誘いだ。エティカも勿論それは知っているはずで、だからユーリテイトもあえてそうとは口にしない。理屈ではない、ということなのだろう。

さておき、昨日ユーリテイトの見たアリステルが装備していたのは、長い銃身を持つ狙撃銃だった。そこから放たれる弾丸の威力が拳銃とは比べ物にならないことくらい、ユーリテイトも理解しているのだ。

狙撃手が？ 虚人？ リデューサー だということ踏まえて考えると、成程無視出来ない脅威である。

自分の置かれている境遇を考えて、ユーリテイトは大きな溜め息を吐いた。

人を探してたまたま訪れた町で、気まぐれに大灯台に上って、偶然少女に話し掛けられて、その少女は『民間防衛機構 クロム』重役の里子で、何故か『教導魔術師団』から追われていて、護衛に五人もの？ 虚人？ が付き添い、魔術師である身ながら、今こうして彼女等と行

動を共にしている。

出来過ぎた偶然だと感心すべきか、運のないことだと嘆くべきか。
「ねーえー、早く入ろうよ!!」

一人先を歩いていたステルシアは、大灯台の入口に立って手を振っていた。

大灯台に上るのが楽しみで仕方ない、と言わんばかりのその振る舞いは、ご令嬢という在り方には程遠い。下手をすれば実年齢以上に幼く見える、市井の少女そのものだ。

「……行こうか。待たせるのも、悪いしね」

「……言われるまでもありません」

苦笑し、ユーリテイトはストリベルの手を引いて歩き出す。数歩遅れてその後を追うエティカは、昨日から思っていた疑問を一つ、意を決してユーリテイトに問いかけた。

「あの、ユーリテイト、……さん」

「……別に無理して敬称なんて付けなくてもいいよ」

ユーリテイトは振り返り、何とも微妙な表情をしたエティカに笑い掛けた。護衛対象たるご令嬢、ステルシアが同行を許したとはいえ、エティカにとってのユーリテイトは護衛対象に纏わりつく素性不明の魔術師 敵だ。ついでに、見た目の年齢で言えばユーリテイトはエティカよりも年下に見える上、既に一度交戦まで果たしている。

敬称を付けて呼ぶことに抵抗を感じるのは、仕方のないことだった。

「……そう、ですか。ではユーリテイト、何故その子は裸足なのでしょう。いくらその……傀儡とはいえ、そのままでは目立つと思うのですが」

「……まあ、そうなんだけどね」

ストリベルを傀儡と呼ぶ前に言い淀んだのは、最初に対面した時の脅しが原因だろうか。ユーリテイトは考える。ストリベルの正体に対して、詮索しないように釘を刺した時の話だ。

「ご存知の通り、魔術師って人種は命を狙われやすいからね。ストリベルが裸足なのは、咄嗟に魔術を発動させる必要がある時、その方が都合がいいからだよ」

「傀儡が、魔術を……。では、この子はやはり虚構人形……。あ」
エティカの視線の先には、足を止めて振り返るユーリタイトの姿がある。そこにはいつも浮かべている薄笑いはなく、一切の感情を取り払ったような無表情があった。

昨日の展望室で帰り際に呼び止めた時は振り返ることさえしなかったストリベルも、今はエティカを見上げるように顔を上げている。視線こそ仮面に隠れて見えないが、今のエティカにはそれだけが、この状況にあつて唯一の救いにも思えた。

ストリベルも同じ色なのだろう、ユーリタイトのその双眸。
淀んだ紅玉のような煉瓦色の瞳には、エティカを戦慄させるだけの何かがあつた。

それは、エティカがこれまで経験してきたどの実戦でも感じたことのない、命を握られたような冷たい感覚。

「好奇心が強いのは結構だけど、詮索は無用だよ。何か思い至ることがあつても、僕としては口にしないことを勧めるね」

「……………」

言葉を返せないエティカを置いて、ユーリタイトは再び雪道を登り始める。手を繋いだままのストリベルも当然それに続き、ステルシアの急かす声に、心を重くしたままエティカは無理やり足を進めた。

二つの大灯台の基本的な構造は、然程変わりがない。

昨日訪れたファンドーラ側の東方大灯台内部と変わり映えないホールから、内壁を沿う形で二重に渦巻く螺旋階段の片方を上り、目的地たる展望室へと歩く四人。

先頭を歩くのは、当然の如くステルシアだ。

その後が続くのがユーリテイトと、手を繋いだままのストリベル。最後尾を歩くのが、やけに静かになったエティカだった。見るからに気落ちしたその姿に、ユーリテイトは少し強く言い過ぎたろうかと、少々の罪悪感がないでもなかったが、先の発言を撤回する気がない以上、自分が慰めるのは筋違いだと静観を決め込んでいる。その様子に気付いたステルシアも、エティカに「どうしたの?」と気遣いを見せていたが、エティカの方はただ機械的に「問題ありません」と繰り返すばかりだ。

視線で問い掛けてくるステルシアにユーリテイトは首を振って答え、どう見ても問題のあるエティカについては、どうせ吐露することはないだろうと放置することになった。

「着いたよーみーんなー。なんか、あっちの灯台と変わらないね!」

展望室へ入るなりそう言っ、ステルシアは昨日と同様にタツタツと窓辺へと駆け寄る。灯台祭の初日であるから、客はいないのではないかと考えていたユーリテイトだったが、この展望室から一望出来る景色にはそれなりの評価もあり、昨日よりは客の人数も多いようだった。

ユーリテイトは窓辺に張り付くステルシアに近いテーブルを選んで椅子に掛け、その隣の席にストリベルを座らせる。対面には、まだ俯き加減のエティカが腰を下ろす。

「ユーリ、ラモネアはどっちに見える?」

呼ばれて、ユーリテイトは座ったまま振り返る。

ステルシアは背中を向けて両手を窓に当て、薄暗い外の景色を眺めているようだった。ユーリテイトも一帯に視線を向けるが、海に向こうにある大陸は勿論、ラモネアの町の明かりさえ見ることは叶わない。

見えるのはただ、灰色の曇り空と異様に明るいアトレータの町並み。更に言うなら、闇を具現したような海原と右手の視界を遮る切り立った崖の断面だけだった。

「……あつちだよ」

それでもユーリテイトは、薄暗い闇の向こうを指差してみせる。振り返ってその指し示す方向を確認し、ステルシアは再び窓の外を見詰める。

「んー、やっぱり見えないなあ……」

それからステルシアは「あーあ」だの「なーんだよー」などと一緒に不満を垂れ流し、それでも展望室からの眺めは気に入っているらしく、展望室の端の方へと窓辺を歩いて離れて行った。

その様子を確認して、ユーリテイトはエティカへと向き直る。その視線を感じてか、エティカはどこか緊張した様子で、それでも気丈にユーリテイトへと視線を合わせた。

「……別に怒ってないから、そんな緊張しなくていいのに」

「き、緊張などー!」

エティカは声を張り上げて、ハッと気付いたようにまた少し俯いてしまう。そんなエティカの反応に、ユーリテイトは苦笑を飲み込んで意識的に真剣な顔を作った。

「……ステルシアのいない内に、聞いておきたいことがあってね」

「………はい、何でしょうか」

その真剣な表情にエティカは身を引き締め直し、仕事時の機械的な、よく言えば毅然とした態度でユーリテイトとの対話に臨む。

どうにも極端だ、とユーリテイトは感じながら、それも今は好都合だと思い直して話を続けた。

「ラモネアで襲撃してきた『教導魔術師団』の魔術師について、教えてくれないかな?」

第二章　？大蛇遣い？　第三話

「……………分かりました。お話ししましょう」

エティカは値踏みするようにユーリテイトを睨み、数秒の沈黙の後に折れた。

こうして行動を共にしている以上、情報の秘匿が得策だとはとても言えない。

「ラモネアに現れた襲撃者は一組の男女でした。女性の方は？大蛇^{サーベント}遣い？の通り名を持つ、推定ですが召喚魔術師、メルニーニ・アドラ・フランベルグ。男性の方は？殺戮請負人？の通り名を持つ、こちらも推定ですが武装魔術師、レインドラ・ルイフォン・リヴェンタ。共に『教導魔術師団』^{ガルド}に所属して十年に満たない、という情報です」

「十年に満たない……………ね。通りで、聞かない名前だ」

呟くようなユーリテイトの台詞はしかし。

「……………何か、仰いましたか？」

幸いエティカには聞こえていないようだった。

「いや、何でもないよ」

「そうですね……………では、続けます。まずは？大蛇遣い？メルニーニですが、名前の通り自らが召喚した大蛇を使役する魔術を使うそうです。どの程度までの召喚が可能なのか、詳しいことは分かりませんが……………複数の首を持つ三十メートルクラスの大蛇が、現在確認されている中では最大の規模ですね」

「それはまた、大した者だね」

素っ気ないユーリテイトの反応に、エティカは不審を隠さず眉根を寄せる。

「……………然程、驚いてるようには見えませんね。そもそも『教導魔術師団』に与する魔術師は、多くの魔術師達とは比較にならない魔力を持っています。貴方の実力がどれ程のものか測りかねますが、先

の大戦での『教導魔術師団』の威光を知らないわけではありませんでしょう？」

「そうだね……、有名どころくらいは把握してるつもりだけど」

ユーリテイトの見た目は、エティカより少し若いくらいだ。精々が十代後半で、生まれた頃には大戦も終結を迎えた頃なのだろうと推測出来る。

エティカ自身、幼少の時分に終結した大戦については多くを知らない。

だからユーリテイトの把握する有名どころの魔術師というのも、記録に残る情報や伝聞によって知り得たものなのだろう。人の手によって伝えられる情報は、良くも悪くも捻じ曲げられるもの。強いと言われたところで実感を持ってないのもまた、仕方のないことだった。

押し黙ったエティカに何を思ったのか、ユーリテイトは溜め息を吐いて言葉を繋ぐ。

「僕だって魔術師の端くれだから、有名な魔術師の存在くらい知ってるよ。ブレイス・メイガス？ 炎の魔術師？ シープ・オーナー？ 羊飼いの？ シン・シンドローム？ 罪の病？ ドリム。後は？ 夢を渡る者？ ウオーカーに…… そうだね、？ 千里皇女？ とか」

それらの通り名は、大戦の時代を知らないエティカでも知っているビッグネームだ。

当代最強と名高い『教導魔術師団』の重鎮たる？ 炎の魔術師？。大戦中、最も多くの命を奪ったとされる古き魔術師？ 羊飼いの？。個の戦力では『教導魔術師団』随一たる快樂殺人者？ 罪の病？。中立組織たる『独立魔術師保護協会』アイムを束ねる？ 夢を渡る者？。その中立組織の最大戦力として魔術師達を率いた？ 千里皇女？。

「……それ程無知、というわけではないのですね」

「まあ、それなりには……ね」

「他の有名どころとなると……一睨みで命を奪う？ 邪眼？イヴィル・アイ。大戦の英雄と呼ばれる？ 白刃？スライサーに、その相方で、同胞殺しとも揶揄される？ 人形師？バベット・マスター。後は……存在すら不確かな？ 無明大公？ブラック・デューク……その辺り

「が有名でしょうか」

「……君もほんと、よく知ってるね」

ユーリテイトは半ば感心したように、呆けた顔でエティカを見詰める。褒められたのが嬉しかったのか、エティカは視線を浮つかせて口元を意味もなく歪める。

それから思い出したように僅かに目を見開き、咳払いをしてユーリテイトに視線を戻した。

「……話が逸れましたね……。では？殺戮請負人？レインドラの魔術についてですが……」

そこで一度言葉を止めて、エティカは僅かに眉を顰める。何か嫌なものでも思い出したような、そんな嫌悪感が滲み出したような表情だ。

「………どうかした？」

「……いえ、大したことでは。レインドラが使う魔術は、端的に言えば血液を操ること、です。魔術師ではない私達には分かりませんが、その血液によって切断や刺突の攻撃が出来ることから考えて、恐らくは血中の鉄分を固めることが出来るのでしょう」

「血液、か……。物騒というか何というか、あまり見たくない魔術だね」

「……それについては、同感です」

「ねえねえ、何のお話？」

バシン、とテーブルに両手をついて、いつの間にかテーブルの側へ来ていたステルシアは、エティカとユーリテイトの顔を順に覗き込む。そのままストリベルの対面の席へ腰を下ろし、どこか気まずそうに沈黙を続ける二人をきよろきよろと見比べる。

「んー？二人共どしたの？」

ステルシアに話しても問題はないのだろうか、と言う疑問を込めてユーリテイトはエティカを見るが、エティカは何とかしるでも言わんばかりに、少々強気な視線でジッとユーリテイトを見詰めている。

その視線を受けてどうしたものかとユーリテイトは辺りを見回し、展望室の隅に設置された大きな置時計が目についた。

「……ああ、そろそろ花火が上がる時間だって話をね」

打ち上げ花火の開始時間は、午後八時の予定だ。少しばかり針がずれているのか、時計が示す時刻は八時を僅かに過ぎたところ。

不意に。

「……おっ？」

「ああ、始まったね」

明るくなった窓の外を見遣り、そこに虹色の光の線を見た。くるくると回転しながら曇天を虹色に染める、幻想という言葉を体現したかのような灯光の二重奏。

「おわあー、すごい綺麗だね、これ!!」

それは海上都市アトレータの代名詞とも言える、二つの大灯台が示す導きの光。

切り立つ崖を挟んでお互いの雄姿は見えずとも、それぞれの灯光は遥か上空に浮かぶ曇天をスクリーンに交わり、海原で彷徨う無数の船をこの人工の港へと誘う光条。

普段は白く澄んだ灯台の光も、この灯台祭の期間中は色硝子によって虹色に染められる。一年に一度だけ、三日間だけの、それは特別な光だ。

「虹色の、光………きれー……」

偶然この時期にこの町を訪れ、年に三日間だけのこの光景を目にすることが出来たステルシアは、成程それなりに運がいいのかも知れない。

口を半開きにして窓の外を仰ぐステルシアを見て、ユーリテイトはそんなことを思う。

その隣に座るエティカも、そんなステルシアの後ろ姿をどこか柔らかな表情で見守っていて、薄笑いのユーリテイトの視線に気付くと、慌てたように澄ましてみせた。

虹色の光に対するステルシアの驚きも冷める頃、まるでタイミン

グを見計らったように、今度は幾つもの笛を鳴らすような音が聞こえた。

「あ、あれっ！！ 何か昇ってるよっ！！」

ステルシアの見下ろす海原の闇から、幾条もの幽かな光が真つ直ぐな軌跡を残して空へ向かう。その光は中空で消えて、そこに大輪の華を咲かせた。

鮮烈に煌めく紅色に、光彩を焼く眩い金色。

砕け散る翡翠は月を背に輝き、海色の破片が曇天を塗り変える。

紫色の散光が空に踊って、銀色の閃光が舞台を照らし。

そうして雅に夜空を彩る絢爛豪華な光の華々に、ステルシアは目を丸くして、呼吸さえ忘れて見入っていた。

今夜だけは忌々しいこの雪も、幻想の夜を色付けるのに欠かせない一つのピースだ。

開花から数秒遅れで聞こえる轟音が窓を震わせ、ステルシアはどこか落ち着かない様子を見せながらも、視線だけは夜空から離れることがない。

その無垢な幼子のような反応が、ユーリテイトには少しだけ悲しく思えた。

恐らくステルシアは、これまで打ち上げ花火を見たことがなかったのだろう。わざわざ問うまでもなく、この反応を見ていれば想像するのは容易い。

十代も後半に差し掛かる娘が、打ち上げ花火の一つも知らない。どこるか、大陸有数の祭典である灯台祭さえ知らなかったのだ。

「大戦の結果がこれか……」

「ん、何か言った？」

聞かせるつもりもなかった呟きに、ステルシアは振り返る。

「……………いや、何でもないよ」

不思議そうに首を傾げて、ステルシアは再び打ち上げ花火へ視線を戻す。

鼓膜を揺らす轟音を差し置いて、ユーリテイトの耳に小さな電子

音が届いた。音が鳴った時間は僅か数秒、音源を辿って見れば携帯電話を片手に立ち上がるエティカがいた。

「アリステルさんです、少し失礼します」

「構わないよ」

席を立つたエティカは、展望室の入口近くまで歩いて携帯電話を頬に当てる。

「ねね、ユーリにお願いがあるんだけど」

「お願い？」

どこか浮ついた表情で、咲き止まぬ花火を背にしたステルシアがパチンと両の掌を合わせる。

「私、町に行ってみたい。お店とか、いっぱいあるんだよね？」

「それは、そうだけど……」

町へ降りる許可を下すのは、当然だがユーリテイトではない。

ステルシアの護衛はあくまでエティカ、並びに四人の？リデューサー虚人？達であって、ユーリテイトやストリベルは部外者でしかない。

どう答えたものかと悩んでいたところで、電話を終えたエティカがやや強張った表情で戻ってきた。

一体何を話していたのだろうと考えて、ユーリテイトは眉根を寄せる。エティカの表情から察するに、吉報でないことは確かである。

「……………アリステルさんから連絡がありました。昨日の……………東方大灯台で？大蛇遣い？メルニー二を目撃したとの通報があったそうです」

「……………例の襲撃者、だね」

「……………はい、これより対象との交戦に入ります」

東方大灯台とはつまり、昨日ユーリテイト達が出会ったもう一つの大灯台だ。ラモネアでステルシアを襲撃したという『教導魔術師団』の魔術師が、今このアトレータに姿を現した。それがつまりどいうことか、意味することは考えるまでもなく一つだけだ。

「……………君も行くのかな？」

「うん？ エティカどこか行くの？」

わざわざ事情を説明した理由を考えると、ユーリテイトにはそれ以外の結論が浮かばない。

「はい、ステルシア様……………相手が相手ですので、仕方ありません。それから、こちらの勝手で申し訳御座いませんが……………ユーリテイト。暫くステルシア様の護衛を引き受けてもらえませんかようか」

第二章　？大蛇遣い？　第四話

「……………僕が？」

この展開を、ユーリテイトは可能性として考慮していなかったわけではない。だが、それでも有り得ないと思っていたことは事実だ。魔術師であるユーリテイトと、魔術師に抗戦するために組織された『民間防衛機構^{クロム}』と。

元々が敵対する立場にあり、両者の間には埋めようのない確執が存在している。

出会い頭に襲撃を受けた昨日の対応こそが、その確執の深さを表しているというものだ。穏やかでないその関係性は、先の大戦における双方の対立という、組織の成り立ちに起因する。

「……………正気かい？」

だからユーリテイトが不審を感じるのも、無理なからぬことである。

そして表情を見る限り、エティカにもそれに近い感情があるのだろう。

「アリステルさんの……………指揮官の命令ですの」

「指揮官って……………サリファンって男じゃなかったの？」

「サリファンさんは副官ですの。アリステルさんはその……………あまり真面目ではないと言いますか……………少々、奔放に過ぎるくらいがありますの……………」

直属の上司に対する批判に気まずさを感じてか、エティカは不機嫌そうな表情を見せながら少々頬を引き攣らせる。視線が余所を彷徨っている辺りはご愛嬌というところだろうか。

指揮官という立場でありながら魔術師に護衛対象を預ける行為を、奔放という言葉で片付けていいのだろうかと思いつながら、結局ユーリテイトはその言葉を呑み込んだ。

わざわざ話をこじれさせる理由もない。

「……ま、僕は構わないけど」
「……………」

想定していたよりも簡単に引き受けて貰えたことが、エティカにとつては逆に不安材料になり得る。変わらない薄笑いも、その下に見え隠れする魔術師としての顔も、目的の知れないその言動も、何もかもがユーリテイトに対する信用を妨げる要因でしかない。

「……ステルシア様にもしもの事があつた時は……」

「そうならないよう、戦いに行くんでしょ？」

苦笑交じりのユーリテイトと。

「もしもつてなーに？」

と、事態を今一つ理解していないステルシア。

「……そう、でしたね」

エティカは心配そうにステルシアを見詰め、物言いたそうな視線をユーリテイトに送り、数歩遠慮した眼差しでストリベルを見遣り、それから取り繕った無表情で溜め息を一つ。

結局のところ、悩んでいる時間はないのだ。

「……それでは、ステルシア様をよろしくお願い致します」

「……ああ、分かったよ」

エティカは渋々、といった感情を隠そうともせず、頭を下げて展望室を後にした。

十

白く染まつた山道を下つて切り立った崖の麓へ走り、十字路の対面へ続くもう一本の山道へ。その先にあるのは、昨日も訪れたファンドーラを臨む東方大灯台だ。

山道を覆う雪には、無数の足跡がまだ消えずに残っている。

ただ、争った形跡は見受けられない。エティカにとってはそれだけが救いだつた。

いかに対魔術師戦闘の申し子たる？リデューサー虚人？といえど、身体能力に

おいては人としての限界を超えない。それでも大灯台間の三キ口、それも雪の積もった山道を十分足らずで駆け抜けて息を切らすこともないエティカは、やはり一般人とは作りが違う。

辿り着いた東方大灯台は、入口の大きな扉に改修工事中の表示が掛かっていた。それはサリファンの手回しによる、昨日の戦闘で刻まれた銃痕を処理するための措置である。

だから周囲に人気はなく、絶えず聞こえてくる銃声や、得体の知れない破碎音を一般の人間に知られることもない。

エティカは腰の後ろに隠した拳銃を抜き、音を殺して大灯台の扉へ寄り掛かった。重厚な木製の扉を震わせる震動が、背中を伝って精神を昂らせて行く。

コンクリートが砕けるような、一際大きな破碎音が灯台の奥の方から聞こえて、エティカは半ば急かされるように扉に体重をかけて内部を覗き込む。

「来たかエティカ」

「アリステルさん」

入口のすぐ側には、狙撃銃を構えたアリステルが立っていた。

灯台の中へ足を踏み入れてアリステルの隣に並び、その重厚な扉を閉じる。そうして状況を確認すべく見渡した大灯台内部の惨状は、エティカの目にも相当に無残な様相を呈している。

石の敷板は剥がれて砕け、壁は無数の銃弾に穿たれ、螺旋階段は半ばで崩れ落ち、そしてそれらを埋め尽くすように、縦横に走る削剥の跡。

その中心に立つのは、白い浴衣の上に薄紅の羽織を纏った妙齡の女性だった。

落ち着き払った物腰と、どこかで見たような薄笑い。白い雨傘の下には喜色の混じった茶色の瞳と艶やかな栗色の長髪が流れており、いつそ不気味とも言えるほどの優美な立ち姿には、どこか浮世離れた魅力があった。

例えばここがどこかの邸宅だったなら、この女性も違和感なくそ

の風景に収まるのだろうか。そう考えると、エティカも何か釈然としないものを感じてしまう。

何故なら、今この女性　メルニーニの周囲にあるのは高価な調度品でもなければ優れた美術品でもない。

美しく微笑むメルニーニの足元には、白く濁った大蛇の鱗。全長にして、恐らくは二十メートルを超える蛇の巨体だ。

それはメルニーニを守るようにとぐるを巻き、地上三メートル近くには人の頭など一呑みに出来そうなほどの大口を持った蛇の頭。

召喚魔術師？大蛇遣い？の行使する、化身系召喚魔術《大蛇の王サーベント・サマナー
ヨルムンガンド》の発現である。

「あら……また増えましたの。よろしいのですか、私一人に？虚人？が五人も……私が一人でないことは、ご存知のはずですが？」

まるで危機感を感じさせないか細い声で？大蛇遣い？は泰然と微笑んだ。

「心配は無用さ……ちゃんと手は打ってある。向こうに仕掛けようもんなら、あんた達みたいなきい魔術師なんざ、一捻りってところだな」

「……それは興味深い話ですね」
アリステルの不敵な言動にも、メルニーニはその余裕を崩さない。逆に調子を崩されたのは、隣に立つエティカの方だった。今の言葉を聞く限りでは、アリステルはえらくユーリテイトの力を評価しているように思える。

「アリステルさん……ユーリテイトと知り合いだったんですか？」

「面白い冗談だな、エティカ。魔術師の知り合いなんて、あたしに
いるわけないだろう？」

「……それはまあ、そうですね」

ただのはったりか、とエティカは内心呆れ、それでも対峙した時に感じたユーリテイトの圧力を思い出して、とりあえずは抗議を呑み込む。

「それによ、そんなに不安なら早いとここつちを片付けちゃえばい

いだけの話さあ？」

そう言つて、アリステルは狙撃銃の銃口をメルニーニへ向ける。
《大蛇の王》の巨体がその射線を遮るように蠢き、その動きに呼応するように、マルティウリとアサルダが拳銃を構え、サリファンが短剣を握り直す。

それぞれの配置を確認し、エティカはアリステルから少し離れて拳銃を握り締める。

「……まったく、理解に苦しみますわね。そこまでして、あの娘を守る意味が貴女方にあるのでしょうか？」

四つの銃口に狙われてなお、メルニーニは態度を変えない。撃たれても防ぎ切る自信があるのか、あるいは躲す自信があるのか。

ラモネアでの襲撃においては逃げに徹し、また攻撃を仕掛けてきたのもレインドラだけであつたため、エティカはメルニーニが戦うところをまだ見たことがない。

召喚された《大蛇の王》でさえ、実物を見るのは初めてだった。

「さあてねえ、こちらお役所仕事なもんでさ」

「……哀れなものです」

そう言つて、メルニーニは右手を前に伸ばす。その動きの意図を解さないまま、アリステルは狙撃銃を発砲し、その銃声に続いてエティカ達三人の拳銃が轟音を鳴らした。

僅か数秒の内に押し寄せた十数発の弾丸はしかし、ただの一発もメルニーニは届かない。拳銃の弾丸は濁った鱗を割つて僅かに肉を抉るに止まり、その三倍近い初速を誇る狙撃銃の弾丸さえ、《大蛇の王》の額を穿ちこそするも、貫通するには至らない。

魔術によつて顕現した《大蛇の王》に、通常の生物の常識など当てはまるはずもなく、銃創程度のダメージでは《大蛇の王》の動きもほとんど阻害することは出来ない。

「……………我が身を焦がす毒を以て、討ち滅ぼす牙と成せ　《制バ眼シリスクの蛇》」

銃撃の止むその僅かな間隙を突いて、メルニーニは薄く笑いなが

ら伸ばした右腕を振り上げる。その動きに合わせて、周囲で新たに三匹の蛇が顕現する。

化身系召喚魔術《制眼の蛇》は、《大蛇の王》と並ぶメルニーニの主力魔術である。後者が防御能力に主眼を置いた蛇なら、前者は攻撃能力に主眼を置いた蛇と言える。

メルニーニを中心に据えてとぐろを巻く《大蛇の王》ほどではないが、それでもその三匹の《制眼の蛇》はそれぞれが三メートルに近い全長を持っていた。

「……………、こいつは笑えねえ」

これまで調子を変えることのなかったアリステルも、言葉を詰まらせ、頬を引き攣らせる。

俗に『魔力』と呼ばれる魔術師の力量を示す単語は、これもまた俗称でしかないのだが、『魔法干涉能力』の略称とされ、それは『干涉強度』『干涉規模』『干涉速度』『干涉深度』の四つの要素によって成り立っている。

魔術師でないアリステル達には理解の及ばない領域ではあるが、魔術や魔法と呼ばれる異能の正体は、つまるところ世界を構成する情報の改編だ。

全ての人が持つ心の中には、それぞれの存在を体現する風景がある。

夢よりも確たる姿を持ち、空想よりも現実に近い、思想や経験に基づいて形成された多様な概念を内包する、原風景や心象風景と呼ばれるものだ。

心に根付いたその風景を彩り、形作る概念は、世界の構成情報を記録する階層　深層意識層における第三階層『虚構世界』　に潜る自我に引き摺られてそこに融和する。

そして『虚構世界』に融和した概念は、世界の構成情報に変質を齎し、そうして改編された事象は『現実世界』に反映される。

纏めてしまえば、『現実世界』の構成情報を各々が心の内に持つ心象風景に似せて書き換える力を『魔法干涉能力』と呼び、その改

編という働きは『事象改編作用』と呼ばれている。

その二つを合わせた呼称こそが魔術であり、それは『干涉強度』『干涉規模』『干涉速度』『干涉深度』の四つの要素によって傾向が評価される、というわけである。

アリステルの知る？大蛇遣い？メルニーニは、主に『干涉強度』に優れた魔術師だ。故に、メルニーニの魔術たる《大蛇の王》は銃弾にも耐え得る強度を持つてそこに在る。

逆説『干涉規模』に優れないがために大蛇の召喚は広範囲に及ばず、『干涉速度』に優れないがために召喚には数秒とはいえ時間を要し、『干涉深度』に優れないがためにメルニーニの抱える概念は大蛇の外へと広がることがない。

だから、現在の『教導魔術師団』メンバーの中では、メルニーニは比較的戦いやすい敵と言えた。

所構わず広範囲に爆炎を撒き散らす？ブレイズ・メイガス炎の魔術師？よりも、殺しても死なない群狼を統べる？シーブ・オーナー羊飼いの？よりも、摂理や法則を無視して巨大な鎌を振り回す？シン・シンドローム罪の病？よりも、ただ巨大な蛇を召喚するだけの相手の方がずっとましである。

あくまでましであって、それでも十分に強敵であることは変わらないのだが。

二十メートルの《大蛇の王》を囲む、三メートルの《制眼の蛇》が三匹。自然、アリステル達の包囲網は広がり、壁際へ押し退けられる形になる。

「今なら、見逃して差し上げてもよろしいのですよ？」

「……どういう意味だそりゃ？」

アリステルの問いに、メルニーニは微笑むばかりで答えない。

第二章　？大蛇遣い？　第五話

「……慈悲のつもりか？」

「どう捉えて貰っても構いませんよ」

今この場所に、ステルシアはいない。だからメルニー二側にはわざわざ戦う意味がない。つまり、ここで逃がしてアリストル達がステルシアと合流したところで、アリストル達存在など護衛としても無意味だということ。

簡潔に言えば、眼中にないということだ。

アリストルは、メルニー二の台詞をそう解釈した。

「……悪いが、あんたには今日死んでもらう」

「出来ますかね、貴女方如きに。悪名高い？リデューサー虚人？の魔術滅殺能力も、所詮はこの程度。期待外れもいいところですね」

弱冠の落胆を滲ませて、メルニー二は溜め息を一つ。

その反応にも眉一つ動かさず、アリストルはメルニー二を睨み続ける。

「勝手に期待を押し付けといて溜め息とは、いいご身分だな」

言いながら、アリストルは狙撃銃のボルトハンドルを引き、空になった薬莢を排出させる。新たな弾丸を装填しながら、アリストルは四人の？虚人？達を流し見て現状を確認。

「ハニー、ヴァル両名はあたしと共に？大蛇遣い？の討伐を。サーベント・サマーエテイカ、サリー両名は周囲の蛇からあたし達を護衛。深追いはするな可能なら討て」

「……了解」

最初に動いたのはエティカと、サリーことサリファン・リヴォル・トリスの二人だった。

それぞれの手に拳銃と短剣を握り、手近な《バジリスク制眼の蛇》へと攻撃を仕掛ける。

短剣の一振りは蛇の胴を両断し、拳銃の弾丸は蛇の胴を貫通し、

二人は暴れ狂う蛇を引き連れてアリステルから距離を取る。

そうして拓かれた空間を抜け、マルティウリとアサルダは《大蛇^{ヨルム}の王^{ソカンド}》へと接近する。その後を追うようにして、アリステルは悠々と《大蛇の王》の前へと歩み出る。

鎌首を擡げた《大蛇の王》の頭部は、アリステルの遙か頭上。

メルニー二の盾たる《大蛇の王》が術者の傍を離れるとは考え難いが、警戒しておくことに越したことはない。アリステルは目測で間合いを測り、目立った動きを見せない《大蛇の王》から一定以上の距離を保ったまま狙撃銃を構える。

左右から攻撃の隙を窺うマルティウリとアサルダに、大胆にも正面に立つアリステル。

これが？虚人？の持つ魔術減殺能力、ですか。強がってはみましたが、正直これは想定外……ですね。現時点での魔力も、恐らくは普段の三割弱、といったところでしょうか。

それ等の事情故に、メルニー二は動きを極端に制限されている。銃撃を防ぐために周囲を《大蛇の王》で固め、狙撃銃への対策として、最も硬い部位である額の向きを制限され、攻勢に出ることもままならない。

この状況を打破するためにと新たに召喚された《制眼の蛇》も、いくら攻撃能力に特化した個体とはいえ、短剣や拳銃による攻撃にさえ耐え切れていないのである。

癪ではありませんが、一度撤退するのが得策……でしょうか。

意地や矜持で命は買えない。戦場ではいかに早く、的確な判断を下せるかが命運を分ける、とメルニー二は経験から学んでいる。

チラリと目を配れば、灯台の壁際には奮闘するエティカとサリファン、そして二人と対峙する《制眼の蛇》の姿があった。

エティカの銃弾は的確に蛇の頭を捉え、所々に弾丸が食い込んでいるのが見えた。

サリファンの短剣は蛇の死角から薙がれ、尾から頭にかけて幾つもの断面を作る。

だが、二人も流石に無傷ではられない。その巨大な顎に並ぶ毒牙こそ今だ防ぎ切ってはいるが、時折掠める蛇身の質量攻撃は、表皮の鱗と合わさって、衣服を破いて幾つもの擦過傷を作っていた。全身を確認することは出来ないが、打撲傷も決して少なくはないはずである。

召喚した《制眼の蛇》は三匹で、エティカとサリファンの相手にそれぞれ一匹ずつを配置しているということは、まだ一匹残っているということである。

まずは退路を確保しましょう。

メルニーニの意志のままに、控えていた《制眼の蛇》が砕けた石畳の上を這いずり出す。メルニーニを囲う《大蛇の王》の脇を抜け、警戒して距離を開いたアリステルを顧みることなく、その際に被弾した狙撃銃による攻撃にも怯むことはなく、やがて門へと辿り付く。

「ちッ、一体何を……ッ」

そして勢いのまま《制眼の蛇》は地面を跳ね、分厚い門扉へとその巨体をぶつけた。鞭のように撓った蛇身の一撃は、総重量百キロを超える二枚の扉を灯台の外へと弾き飛ばす。

その代償として、身体の大半が潰れてしまった《制眼の蛇》の惨状に、メルニーニは内心で齒噛みした。通常の環境下であれば、精々鱗の一部を犠牲にする程度で済んだことだろう。

扉と一緒に灯台の外へと飛び出した《制眼の蛇》は、しかしそれきり動くことはなかった。その蛇身は降り注ぐ雪に埋もれながら徐々に形を崩し、やがて完全に消失する。

耐久値の限界を超えたが故の、それは必然たる帰結だった。

まさか逃げようつてのか？

思つて、アリステルは開かれた門からメルニーニへと視線を移す。相対する《大蛇の王》は、先刻よりも幾分頭を低くしていた。それはつまり、接地面積が増えたということだ。

「ハニー、ヴァル、蛇の頭を狙え！！」

アリステルの怒号に、名前を呼ばれた二人　マルティウリ・レクト・ハニスとアサルダ・ダリエ・ヴァレンタムの二人は、構えた銃を《大蛇の王》の頭へ向ける。

同時に、発砲。

「撃ち続ける！！」

短い指令を発し、アリステルは地面を蹴った。

それまでアリステルに対する牽制の役割を担っていた《大蛇の王》は、その局所的な弾丸の雨に、紙束を破く音に似た耳障りな鳴き声を上げる。巨体を擦じらせ、なんとか執拗な弾丸の雨から抜け出そうともがくも、メルニーニの護衛という行動制限がある以上持ち場を離れて敵に喰らい付くことも出来ず、ただただ撃たれるがままといった様子だった。

流石に、場慣れしているようですね……。

アリステルの指示した戦法は、《大蛇の王》の動きを乱すという一点のみに目的を絞ったものである。元より、それで倒せるとは考えていない。

召喚魔術によって使役されるものは、分類上の名前で实在精霊と呼ばれている。

独立第五大系とも呼ばれる魔術大系　化身大系。

その大系において、メルニーニの使用する召喚魔術の他には、精霊魔術、傀儡魔術、憑依魔術の三つが存在している。

召喚魔術は、实在精霊を使役する魔術だ。顕現に媒体を必要とせず、術者の意思の一部を自我として内包し、独立した行動を取れる化身である。

精霊魔術は、虚構精霊を使役する魔術だ。顕現に媒体を必要として、術者の意思の一部を自我として内包し、独立した行動を取れる化身である。

傀儡魔術は、实在、或いは虚構人形を使役する魔術だ。使役対象は人型に限らず、術者の意思を写し、身体の一部として操り動かす化身である。

憑依魔術は、知覚や感覚を外界と共有する魔術だ。魔術による妨害がなければ、他者のみならず人形や精霊にまで効果の及ぶ特殊な魔術である。

實在精霊である《大蛇の王》は、だからマルティウリやアサルダの銃撃を無視出来ない。

なまじ自己の判断によつて、魔術師の指示なしでも動ける代わりに、外部からの刺激にも相応の反応を示してしまう弊害。

メルニーニは視界の端に、アリステルの姿を捉える。渦巻く《大蛇の王》の巨体を盾に姿を隠しながら、恐らくは狙撃ポイントを探していたのだらう。

僅か一瞬の、視線の交錯。

持ち上がる狙撃銃を認識し、メルニーニは《大蛇の王》の巨体を意に従えて持ち上げる。直後に炸裂したズドン、という轟音に若干身体を強張らせ、しかしあるはずの被害は、ない。

外したのでしょうか？

考えて、それはないだろうとすぐに打ち消す。

では今の銃声は、と考えたところで

「うぐッ!？」

マルティウリとアサルダの銃撃の音に紛れて、聞き取れたのは二発の銃声。

だがそうと認識する前に、メルニーニの背中を強烈な衝撃が襲った。

身体が揺らぎ、白い傘がその手から零れ落ちる。

撃たれた、と認識して、メルニーニは数歩を進みながらも踏み止まる。肩越しに視線を配れば、既に後退して距離を取ったエティカの姿が、蛇身と石畳の隙間にあつた。

その傍らには消滅間近の《制眼の蛇》が、ピクリとも動かずに横たわっている。

まさか狙撃銃の最初の一撃で……、では今の二発の銃声は？
一発は、背後からメルニーニを狙ったエティカの一撃。

ではもう一発、恐らくは狙撃銃の発砲音だったであろうそれは、何を狙ったのか。

その答えは、メルニー二の背後に迫っていた。

「呆れたな。鎧代わりに蛇皮を着込んでいたわけか」

「く、ああ……っ!!」

背後、至近から聞こえた声に、メルニー二は振り返りながら飛び退ろうとして、銃撃を受けた背中的一点に短剣の刺突を受けた。決るように回転を加えられた、重く鋭い一撃。

二発目は、もう一匹の《制眼の蛇》を狙って……っ!?

刺突の威力に押し切られるまま、メルニー二はサリファンから距離を取る。破れた浴衣の下には、薄らと浮かぶ鱗の模様が見て取れた。

拳銃で撃たれ、短剣で刺されながら、しかしメルニー二が受けたダメージは少量の血が滲む程度のものである。

その小さな戦果を目にして、サリファンは目つきを険しくする。追い縋り、振るわれた短剣の一振り、メルニー二の腕を捉え、そして弾かれる。二度、三度と振るわれる短剣は、接触の度に体表を覆う鱗に小さな傷を刻むが、ただの一度も貫くには至らない。襲い来る剣劇を両手で払いながら、メルニー二は目を細める。

鎧代わりのこの鱗も、魔術の減殺効果に当てられて身体に馴染まなくなっていますね。とはいえ、生身で受ければ確実に腕が飛びますし……。

サリファンの攻撃を避け切るとは叶わず、短剣を受けた際の傷からは血液が滴っている。更に、周囲を取り囲む《大蛇の王》の外にはまだ四人の？虚人？達が控えているこの現状。

開かれた門まで、約十二メートルの距離をどうやって稼ぐのか。

まさかこんなところで、切り札の一つを披露することになるとは思いませんでしたか。

小さく深呼吸をして、メルニー二はサリファンと視線を合わせる。視線の交錯は、一秒に満たない。

そして次の瞬間には、今まさに短剣を突き出そうとしていたサリファンの身体が、そのままの姿勢で前のめりに倒れる。受け身さえ取らず、石畳に短剣を突き立てるようにして、そこから横倒しに転がり、しかし石化したように動きがない。

それはメルニー二の秘匿する魔術、概念系拘束魔術《制圧の魔眼スプレマシー》の発現だ。

「サリファンさん……っ！！」

灯台の壁際へ移動し、瓦礫の上に立つて丁度その瞬間を目撃してしまったエティカが、驚嘆と悲痛を織り交ぜたような声を上げる。

その声を聞いたメルニー二はエティカへと振り返り、その過程で視界に入ったアリステルの姿に言いようのない悪寒を覚えた。ほとんど意識の追いつかぬまま、反射に近い感覚で、メルニー二は《大蛇の王》の巨体でアリステルとの射線を遮る。

直後に響いたのは、腹の奥を揺らすような重い銃声。

メルニー二の眼前で、《大蛇の王》の血肉が弾けた。

脱着式の弾倉に詰め込まれた弾丸がなくなるまで、アリステルは引き金を引き続ける。

発砲し、薬莢を排出させ、発砲し、薬莢を排出させ。

繰り返し、繰り返し、ただ執拗に、引き金を引いて。

その剣幕に注意を引かれ、爆ぜ行く《大蛇の王》の巨体をただ見守ることしか出来ず。

遂に貫通させることも出来ず、空いた弾倉を捨てて。

荒ぶる《大蛇の王》に、敵の一掃を命じようとして。

意識の間、《大蛇の王》の防壁を抜けたエティカの向ける銃口が、メルニー二を捉え。

「動かないで下さい。いくら貴女でも、この至近で頭を撃たれたくはないでしょう」

「……………」

ゴツリ、と硬い感触を後頭部に感じて、メルニー二は自らの不覚を悟った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9154y/>

虚構世界の魔法使い

2011年12月31日21時48分発行